小浜風童太鼓

特定非営利活動法人ふくしま新文化創造委員会

東船岡地区子ども会育成会文化部
三名生親子太鼓

失語症友の会「はまりゃすぺゃ」

大槌町青年団体連絡協議会

公益社団法人
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

釜石あの日あの時甚句つたえ隊

認知症にやさしい地域支援の会

二本松市建設技術学院跡地
仮設住宅・浪江フラコスモス

川根振興協議会

特定非営利活動法人
みやぎ子ども養育支援の会

劇団「ババーズ」

高橋　久子

ぐるーぷなか

㈱onagawa factory
小さな復興プロジェクト

独立行政法人福祉医療機構　平成25年度社会福祉振興助成事業

DVD付

第1回 いがす大賞 15の実践

I.A

東日本大震災・おらいの地域の元気興し

「いがす」とは･･･宮城をはじめとした東北の方言で、
「いいね！」「了解しました」などの意味です。
仮設住宅のひろばで人が何気なく集まるようになって生まれた「お茶会」や、
趣味や特技など自分たちの経験から生まれた
「いきがい仕事」「伝統行事の継承」「語り部」「まちおこし」「コミュニティビジネス」など、
人と人がつながり、被災地がもっといきいきするような
地域活動を発掘・発信する「第1回いがす大賞」での15の実践を紹介します。

CLC
Community Life Support Center

第１回いがす大賞

■主　催

特定非営利活動法人　全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

■協　力

第1回「いがす大賞」実行委員会

■助　成

独立行政法人福祉医療機構　平成25年度社会福祉振興助成事業

■プレミアム協賛（順不同）

公益財団法人正光会／きのこエスポアール病院／株式会社 ゼリアトリックメディカルサプライ／
三豊市立西香川病院／東北紙工株式会社／一般社団法人パーソナルサポートセンター／酒井×法子／
特定非営利活動法人 暮らしづくりネットワーク北芝

■協　賛（順不同）

富士通株式会社／株式会社マイヤ／株式会社コムメディア／株式会社サトー技建／
キリンビールマーケティング株式会社宮城支社／キリンビールマーケティング株式会社栃木支社／
公益財団法人 損保ジャパン記念財団／菊地 祥明／ハインツ日本株式会社／特定非営利活動法人 コーヒータイム／
JTB東北 法人営業仙台支店／株式会社ボリショイサーカス／株式会社ビークルーズ／
社会福祉法人 淡路市社会福祉協議会／特定非営利活動法人 グループもみじ／託老所あんき／
日本生活協同組合連合会／石巻中央ライオンズクラブ／東北福祉大学・社会福祉法人東北福祉会／日本福祉大学／
大勇堂／株式会社フジマル／くまもと福祉のラウンドテーブル（山下順子、藤村文子、森枝敏郎ほか）／
特定非営利活動法人にしはらたんぽぽハウス／有限会社七七舎／
ベーカリーカフェ ぱすてる（社会福祉法人松花苑 ワークスおーい内）／仙台北山郵便局／
株式会社 オンワード・マエノ／杜の都信用金庫 北仙台支店／杜の都信用金庫 泉中山支店／仙台銀行 北山支店／
特定非営利活動法人 ちば地域生活支援舎／東金の三浦さん／住友生命保険相互会社／
有限会社ミリオンピクセルス／トップツアー株式会社 仙台支店／遊食カフェずっけろ／あとりえ横山

■後　援

復興庁／総務省／厚生労働省 東北厚生局／農林水産省 東北農政局／経済産業省 東北経済産業局／
国土交通省 東北地方整備局／岩手県／宮城県／福島県／仙台市／社会福祉法人 岩手県社会福祉協議会／
社会福祉法人 宮城県社会福祉協議会／社会福祉法人 福島県社会福祉協議会／
社会福祉法人 仙台市社会福祉協議会／岩手県教育委員会／宮城県教育委員会／福島県教育委員会／
仙台市教育委員会／朝日新聞仙台総局／読売新聞東北総局／毎日新聞社／岩手日報社／株式会社東海新報社／
河北新報社／三陸河北新報社／株式会社石巻日日新聞社／福島民報社／福島民友新聞社／
NHK仙台放送局／IBC岩手放送／株式会社テレビ岩手／めんこいテレビ／岩手朝日テレビ／TBC東北放送／
仙台放送／ミヤギテレビ／KHB東日本放送／福島テレビ／株式会社福島中央テレビ／
株式会社福島放送／テレビユー福島／エフエム岩手／ラヂオもりおか／えふえむ花巻株式会社／
NPO法人陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA陸前高田災害FM／エフエム仙台／ラジオ3 FM76.2／
エフエムたいはく株式会社／fmいずみ797 www.fm797.co.jp／ラジオ石巻 FM 76.4／BAYWAVE／
特定非営利活動法人エフエムなとり／株式会社エフエムいわぬま／H@!FM／
亘理町臨時災害放送わたりさいがいFM　FMあおぞら／山元町臨時災害FM放送りんごラジオ／
株式会社ラジオ福島／ふくしまFM／福島コミュニティ放送FMポコ／株式会社エフエム会津／
いわき市民コミュニティ放送／喜多方シティエフエム／そうまさいがいエフエム／ひばりエフエム

はじめに

東日本大震災から丸３年が経過し、被災自治体では集団移転や災害公営住宅の建設などの復興計画がすすんでいますが、その歩みは自治体によって格差があります。仮設住宅では、家族や仕事、仲間など生きがいを失い、孤独感を深めている姿があるなか、自立再建できる被災世帯とそうでない世帯の格差が見えつつあり、仮設住宅内で築いたコミュニティが崩れ、生活課題を抱えて仮設住宅に取り残される人たちへのケアや自治が課題となっています。さらに、防災集団移転や災害公営住宅への転居により、さらに新たなコミュニティの形成が求められ、災害公営住宅が立地する周辺の住民との交流や自治のあり方も課題となり始めています。

そこで、住民一人ひとりが生きがいをもち、地域で支え合って暮らす社会を築く一歩として、住民が積極的に取り組む支え合う自治活動並びに生きがいづくりを主眼に置いた仕事づくりを発掘するための「第1回いがす大賞」を企画し、実行委員会を立ち上げました。開催にあたっては、独立行政法人福祉医療機構の「平成25年度社会福祉振興助成事業」とともに、賛同いただいた団体・個人からの協賛金品を活用させていただきました。

被災地での取り組みのみならず、全国から被災地に役立つ実践の提案を公募したところ、予想以上の102件もの応募をいただきました。2013年12月21日の本選では、事前審査会を通過した15団体・個人がプレゼンテーションを行い、審査委員と一般観覧者の投票により、大賞を決定。賞金のほか、大賞と準大賞受賞者には副賞として「神戸いがす旅」が授与されました。さらに、被災３県で地元の実践者による実践交流会を行い、「いがす（宮城の方言で「いいね」）」「イカした」実践の芽を共有しました。

この冊子では、いがす大賞の活動報告とともに、事前審査会を経て当日プレゼンテーションをした15団体の取り組みを詳しく取り上げ、成り立ちや活動内容、地域で支え合って暮らすためのヒントを紹介しています。これらの実践は、東日本大震災の被災地の復興をあと押しするだけでなく、被災の有無にかかわらず、平時より活かせる視点ばかりです。誰もが安心・安全に地域で暮らせる社会をめざし、本書を活用いただけましたら幸いです。

2014年3月

特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター
理事長　池田　昌弘

目 次

はじめに …… 1

「第1回いがす大賞」とは …… 4

いがす実践1★ 「サークル活動は私たちの誇り！自慢の仮設住宅」 大賞受賞
二本松市建設技術学院跡応急仮設住宅（福島県二本松市） …… 6

いがす実践2★ 「相撲甚句の節にのせ震災の記憶歌う　歌の力で心の復興後押し」 準大賞受賞
釜石あの日あの時甚句つたえ隊（岩手県釜石市） …… 10

いがす実践3★ 「故郷を慕う歌づくり　作詞で自分を奮い立たせ、仲間を励ます」 特別賞受賞
高橋久子さん（宮城県名取市） …… 14

いがす実践4★ 「地域の福祉力で　復興公営住宅の住民を支える」 活動奨励賞受賞
ボランティア「ぐるーぷ　なか」（兵庫県宝塚市） …… 18

いがす実践5★ 「震災きっかけに失語症者と家族が団結　だれもが普通に暮らせるまち目指す」
失語症友の会「はまりゃすぺゃ」（岩手県大船渡市） …… 22

いがす実践6★ 「認知症は地域で支え合い　仮設住宅で寸劇上演も」
認知症にやさしい地域支援の会（岩手県陸前高田市） …… 26

いがす実践7★ 「町の未来、笑顔で描こう　岩手県大槌町にご当地ヒーロー登場」
大槌町青年団体連絡協議会（岩手県大槌町） …… 30

いがす実践8★ 「子どもの権利と育ちを応援する社会づくり」
公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（宮城県仙台市・石巻市） …… 34

いがす実践9★ 「地域全体で子どもたちの暮らしを考える」
特定非営利活動法人みやぎ子ども療育支援の会（宮城県仙台市・石巻市） …… 38

いがす実践10★ 「女川で木工製品などの工房立ち上げ　高い品質とデザインでブランド化目指す」
株式会社onagawa factory「小さな復興プロジェクト」（宮城県女川町） …… 42

いがす実践11★ 「5歳児親子の音色　太鼓をとおした地域での子育て」
東船岡地区子ども会育成会文化部「三名生親子太鼓」（宮城県柴田町） …… 46

いがす実践12★ 「福島に100年続く文化を！新たな未来を築く男性たち」
特定非営利活動法人ふくしま新文化創造委員会（福島県福島市） …… 50

いがす実践13★ 「受け継がれる太鼓の音色　まちを元気にする太鼓演奏」
小浜風童太鼓（福島県富岡町・いわき市） …… 54

いがす実践14★ 「平均年齢80歳！　住民たちが輝くまちの劇団」
劇団ババーズ（福井県福井市） …… 58

いがす実践15★ 「地域の全戸が加入　住民が運営する、地域まるごと博物館！」
川根振興協議会（広島県安芸高田市） …… 61

全国から寄せられた いがす実践・活動提案紹介！！ …… 64

東日本大震災・おらいの地域の元気興し「第1回いがす大賞」実施報告
実行委員会／審査委員会／いがす実践交流会／神戸いがす旅／マスコミ報道 …… 70

東日本大震災・おらいの地域の元気興し「第1回いがす大賞」アンケート集計 …… 75

「第1回いがす大賞」を終えて …… 80

「第1回いがす大賞」とは

★趣　旨★

2011年3月11日に発災した東日本大震災後、地域にはさまざまな住民活動やつながりが生まれました。

「小物づくりや体操などで集まるように。そこから大切な仲間ができました！」

「新たな暮らしを築くために、住民・団体が一丸となって、まちづくりを行っています！」

そういった、地域が元気になるような活動、参加者がいきいきした活動、思いがあふれる活動は、あなたのまわりにもきっとあるはず。

第1回いがす大賞は、そんな地域や人を想う熱い気持ちのこもった活動を公募、発信することで学び合い、認め合い、応募者同士の交流を図って、【それぞれの取り組みが、より魅力的な活動になるためのヒントを得る場となること】、そして【各地域での活動が、一つの地域だけにとどまるのではなく、多くの地域に広まること】を目的に開催します。

生きがいを感じる活動、住民みんなで支え合う生活は、被災地の復興をあと押しするだけでなく、全国各地の地域活動にも活力を与えると考えます。いがす大賞をきっかけに、また一つ、地域を明るく照らす素敵な活動が生まれることを期待します。

★主　催★

特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）

★協　力★

第1回いがす大賞実行委員会

実行委員長：社会福祉法人ありのまま舎理事長・仙台白百合女子大学人間学部教授

大坂　純

★内　容★

1 実行委員会の設置・開催

2 「第1回いがす大賞」の実施

　1 全国から実践を公募：2013年9月～10月

　2 事前選考審査会：2013年11月12日　宮城県仙台市・CLC本部事務所にて
　　93団体102件の応募があり、書類選考によって審査委員が15団体・個人を選出。

　3 本選に選出された15団体を訪問し、本選でのプレゼンテーションについて打ち合わるとともに、本選のパンフレット及び活動を紹介する映像を作成するための取材及び収録を実施。

　4 本選：2013年12月21日 宮城県仙台市・仙台市太白区文化センター 楽楽楽ホールにて
　　15団体・個人がプレゼンテーションを行い、審査委員と一般観覧者の投票により、大賞を決定。活動のPRや物品販売のできるブース出展スペースも用意。

3 実践状況調査の実施

4 被災3県での「いがす実践交流会」の実施

※上記の詳細は、70～74頁をご覧ください。

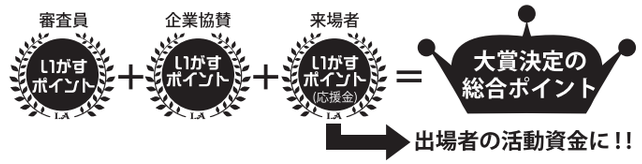
当日プログラム

12:00	**開場**
13:00～13:10	**開会**（オープニング・いがすとは!?／審査委員紹介ほか）
13:20～14:20	**実践部門発表**
14:20～14:30	**いがすポイントの投票／休憩**
14:30～15:00	**活動提案部門発表**
15:00～15:10	**いがすポイントの投票／休憩**
15:10～16:10	**実践部門発表**
16:10～16:25	**いがすポイントの投票／休憩**
16:25～16:50	**いがす抽選会&情熱体操**（いがす景品が当たる!抽選会&情熱家 博多和宏さんのパフォーマンス）
16:50～17:20	**表彰式・閉会**
17:20～18:00	**交流TIME**（当日自由参加です!! 交流を深めませんか??）

最終選考の方法

最終選考は、プレミアム協賛の企業・団体や来場者のみなさまの「いがすポイント」を加味して、審査委員により選考し確定します。

当日ご来場されたみなさまに応募券を1口1,000円で販売します。そのうち500円分は自分の気に入った出場者にいがすポイントとして投票（寄付）することができます。



※残りの500円分は大会運営費に使わせていただきます。

審査基準

おらほ度・・・・・自分らしさ、やりたいこと、思いが前面に出ている。

おもせ度・・・・・内容がとにかくおもしろい。

のさる度・・・・・誰でも気軽に参加でき、いきおいがある。

おがる度・・・・・今後の成長に期待できる。

いがす度・・・・・これぞいがす！直感に訴えかけるものがある。

いがす実践1★いがす大賞受賞

サークル活動は私たちの誇り！自慢の仮設住宅

二本松市建設技術学院跡地応急仮設住宅

【福島県二本松市】

受賞理由　仮設住宅の皆さんが、故郷の味を大切にして支え合い、さらに支援をしてくださった人にもその味でお礼を伝えるなど、双方向で交流し、多様な人とつながる意義を私たちに教えてくださいました。

▲自治会長の鎌田優さん（後列中央）とサークル活動の達人たち！

集会所に一歩足を踏み入れた途端、大きな笑い声が聞こえる。集会所だけではない。敷地内のいたるところに響くにぎやかな話し声。そして、どの場所に行っても見える住民たちの晴れやかな笑顔が印象的だ。いつでもどんなときでも笑い声が絶えない仮設住宅。それが、福島県二本松市にある二本松市建設技術学院跡地応急仮設住宅だ。

2011年８月から入居が始まった同仮設住宅には、福島県浪江町出身の住民22世帯が暮らしている。「世帯が少ないこともあるけど、ここの仮設住宅で知らない人はいない。知らないどころかみんな仲良しだよ」そう話すのは、自治会長の鎌田優さん。鎌田さんだけではない。「あんまりみんながいい人すぎるからさ。浪江の人ってこんなにいい人だったっけ!?って思っちゃうよね」と、住民の金澤秀子さんは話す。もちろん、住民全員が同じ気持ちだ。「特別なことをしているわけではないんだけど、なんとなしにみんな集まるんだ」と、武石初男さん。仮設住宅内で出会った人にお話を伺うと、どの人に聞いても、「ここは本当にいいところだよ」「みんな仲良しだよ」といった言葉が返ってくる。

住民全員が同じまちの出身ということもあり、最初から仲が良かったのかと思ったのだが、実はそうではないらしい。ではなぜ、こんなにも住民たちの親交が深まっているのか、その秘密は仮設住宅内で行われているサークル活動にあった。

サークル活動で深まる交流

「みんな浪江町出身だけど、住んでいた地区が違うからね。仮設住宅に入居したばっかりの頃は、外でたまたま会ってポツポツ話すことはあっても、今みたいに“みんなで盛り上がろう”“なんでも話し合おうよ”って雰囲気ではなかったんです。私たち自身、まさかこんなに仲良くなるなんて思ってなかったよね」そう振り返る、鎌田キヌさん。住民同士の交流は、最初から活発なわけではなかったそうだ。「あのときは“ないない尽くし”だったんだよね。物もない、知り合いもいない、外に出る用事もない。震災によってみんないろんな苦しさや憤りを抱えていた。でも心のなかには、ふさぎ込んでばかりではいけない、浪江にいた頃のように、楽しく暮らしたいという気持ちももちろんありました。仮設住宅での生活がどのくらいの期間になるのかはわからないけれど、縁あって同じ場所に集まったんだもの。なんとかしなければと思っていました」そう話す鎌田さん。このままではいけない。まずはみんなが集まるきっかけをつくらなければ。

そこで、住民有志数人が立ち上がり、今なにをしたいかを住民全員に聞くことに。「『なにかやりたいことはない？』って聞かれて、なんだろうねって話していたら、浪江にいた頃、絵手紙をつくったことがある人が何人かいることがわかったんです。教えられる人もいることだし、じゃあやってみようかということになりました」と、小林美代子さん。そうして開催された絵手紙づくり。これが、同仮設住宅にとっての大きな転機となった。

迎えた絵手紙づくりの当日。それまであまり話す機会のなかった住民たちだが、作業をしながら、少しずつ会話が弾むように。浪江のこと、今の暮らしについてなど、次から次へと言葉があふれた。それだけではない。「フラダンスもやってみたいよね」「知り合いにフラダンスの先生いるよ！」「手芸が得意なんだ」という言葉も。やりたいことがある。その気づきは、住民たちにとって大きな前進だった。

▲小物づくりサークルでつくったものは、これまで支援してくださったボランティアにお礼として渡している

暮らしに活気が！

絵手紙づくりをきっかけに、仮設住宅での生活が徐々に変わっていった。“やりたいことがいっぱいあるんだ、片っ端からやってみようよ！”と、思いついたものから実行することに。一つサークルが立ち上がるとまた一つ別のサークルが立ち上がり、今では絵手紙、フラダンス、手芸、ケーナ、民謡、ウクレレ、尺八など、多くのサークル活動が行われている。自治会で毎月つくっている仮設住宅内の予定表を見ると、休みの日としている火曜日以外は、サークルの予定でびっしり。「サークル活動といっても、メインはお茶飲みをしながら話す時間だったりする。毎日みんなの顔を見るってことがたいせつなんだよね。顔を見ないとなんか落ち着かないっていうか、寂しいもんな」と、太田敬重さん。フラダンスサークルに参加している遠藤洋子さん、武石定子さんは、「フラダンスの先生も『来るたびにうまくなってるね』って言ってくれて。それもすごくうれしいよね」「一週間が本当にあっという間！」と、その表情はとても晴れやか。住民たちの暮らしに、楽しみや生きがい、活気が生まれた。

私たちの番

日を重ねるごとに仲が深まり、結束が強まっていった住民たち。そうしたなか芽生えたのは、震災後に自分たちを支えてくれた支援者や仮設住宅周辺地域の住民に恩返しをしたいという気持ちだった。「助けてもらってばっかりじゃいつまでも被災者のまま。自分たちのためにもそれではいけないと思っています。これからは私たちが感謝の気持ちを返していく番なんです」と、鎌田さん。

お世話になった人たちに喜んでもらえることをと、住民たちは地域でのイベントや近隣にある保育園の行事へ積極的に出向き、同仮設住宅名物の焼きそばを振る舞ったり、フラダンスを披露。もちろん、自分たちの仮設住宅でイベントが開催されるときには、地域住民も招待している。イベントに来ていた近隣住民は、「ここの皆さんは、いつも『今日こんなのあるよ、来てみてね』って声を掛けてくれるんです。孫も何回も来させてもらって、私たちのほうがお礼しなくちゃなんだ」と、うれしそうに目を細める。

サークルの一つである手芸活動でつくった作品も、すべてこれまでかかわったボランティアにプレゼントしているとのこと。「皆さんにいっぱいお世話になったからね。一つひとつ気持ちを込めてつくっているんだ」と、田中トクさんは作品をぎゅっと握りしめる。

▲敷地内で行ったイベントではフラダンス、民謡、尺八を披露。地域の人もたくさん来てくださった

住民自慢の仮設住宅

「仮設住宅での暮らしは窮屈だ、嫌だ嫌だってよく言うじゃない。確かに最初は、こんな狭い部屋で知らない人ばっかりでやだなぁと思ったよ。でも今は、俺たちほど仮設住宅の生活を楽しんでいる人たちもいないんじゃないかって思うんだよね。みんな本当におもしろいだろう」と、笑顔で話す遠藤清之さん。その表情は清々しく、誇らしげ。

お昼が近づくと、敷地内にある住民たち手づくりの“秘密の隠れ家”に集合。「漬物あるよ！」「朝にちょっと残ったのだけど、おいしかったからそれ持ってくるね！」と、それぞれ自宅から惣菜を持ちより、にぎやかな昼食会が始まる。夜になると、隠れ家で飲み会を開催することも。

「ここでよかった。みんなと会えてよかった」住民たちが話す言葉の一つひとつから、今の暮らしへの愛情が感じられる。そして、地域の人たちも、同じように同仮設住宅に暮らす人たちに対して愛情を抱いている。二本松市建設技術学院跡地応急仮設住宅は、住民自慢の仮設住宅だ。

▲敷地内に手づくりの隠れ家を！毎日ここでお昼を一緒に食べている▼

いがす実践2★いがす準大賞受賞

相撲甚句の節に乗せ震災の記憶歌う 歌の力で心の復興後押し

釜石あの日あの時甚句つたえ隊

【岩手県釜石市】

受賞理由　甚句をとおして市民が体験した震災の教訓を伝える活動は、庶民性とパフォーマンスの芸術性があいまって、本当に人の心にしみわたる、いがす活動でした。

▲「釜石あの日あの時甚句つたえ隊」の北村弘子さん（左）と藤原マチ子さん（右）

時は三月十一日の／忘れもしない大震災／
千年一度の大地震／誰が思うかあの津波……

相撲甚句の節に乗せて朗々と歌われる、東日本大震災の惨状、寒さと恐怖に震えて過ごした夜、大切な人を失った悲しみ、鎮魂の祈り。あるいは、救援に対する感謝、伝えてゆくべき教訓、子どもたちに託される希望など。

ステージに立つのは、色鮮やかな長袢纏（ながばんてん）を身にまとう二人の女性。

歌は藤原マチ子さんが、口上と「手舞」は北村弘子さんが、それぞれ担当する。手舞は、ゆったりとした手と腕の動きで歌の内容を描き出す、北村さん独特の表現手法。

藤原さんの艶のある力強い声と、北村さんのどこか哀愁を帯びた優雅な手舞が渾然一体となって、聴衆に訴えかける。あちこちですすり泣きが漏れる。聴衆の表情には悲しみが宿っているが、不思議と痛々しさはない。むしろ、静かな落ち着きと、穏やかさが漂う。

甚句の節回しが心に響きわたる

震災から３年が過ぎた。つらい記憶は今なおガラスの破片のように、被災者の心に突き刺さっている。

彼女たちの歌は、写真や動画のように感覚を強く刺激することはせず、そっと人の心へしみ込んでいく。耳を通して心に響き、母の手のように優しく感情をゆり動かす。

歌が傷ついた心に作用し、傷口から悲しみがあふれ出す。歌によって流れ出た悲しみは、なぜか温かい。それは心に突き刺さった破片を溶かし、傷を洗うかのようだ。

甚句は都々逸（どどいつ）などと同じく、日本の伝統的な歌謡のひとつ。歌詞は七五調のリズムを刻み、人の心の動きや、ある出来事の情景を描き出す。歌であると同時に「語り」の要素を強く持っている。

実は二人とも、震災前から釜石市の民話語り部団体「漁火（いさりび）の会」に所属していた。甚句を始めたのは、共通の友人で旅館「宝来館」（釜石市鵜住居（うのすまいちょう）町）の女将・岩﨑昭子さんの勧めがきっかけ。

岩﨑さんは、藤原さんが甚句の優れた歌い手であることを知っていた。藤原さんは相撲取りだった兄を震災で亡くしている。亡くなったお兄さんの分まで、人びとを元気づける甚句を歌ってほしい…岩﨑さんにはそんな思いがあったようだ。

藤原さんに歌うことを勧める一方、北村さんには作詞を頼んだ。語りの名手である北村さんは作詞のほか、「はぁーどすこい、どすこい」といった合いの手や、口上も引き受けた。

藤原さんは「初めはとてもつらくて歌えませんでした。それに、こんな歌を歌っていいのか、聴いた人を傷つけるんじゃないかと悩みました」と、当時を振り返る。

▲鮮やかなステージ衣装は、津波をくぐり抜けた大漁旗から仕立て上げられた長袢纏（ながばんてん）。大漁旗に付きものの「祝」の文字はあえて外してある

岩﨑さんから「復興甚句を」と言われたことも気に掛かった。「復興はまだまだ道半ばなのに、復興甚句を名乗るなんてできませんでした。今だってそうです」と北村さん。

相談の末「復興甚句はできないけれど、震災を忘れないための『あの日あの時甚句』はつくれるだろうと」（藤原さん）。

こうして、2012年12月、釜石あの日あの時甚句つたえ隊が結成された。

藤原さんは相撲甚句の歌い方を正式に習ったことはない。幼いころに母親が歌っていたのを耳で覚えた。何度も聞いた母の歌。その節回しはしっかりと身体に刻み込まれている。

歌詞は、「１作目ができたら、その後はあれよあれよと次々にできました。つくったというより、降ってきた、という感じ」（北村さん）。

甚句の節回しに合うよう、藤原さんが必要に応じて編詞をした。制作も朗誦も、まさに二人の共同作業と言える。

▲活動拠点となっている旅館「宝来館」（釜石市鵜住居町）

第１作目は、釜石東中学校や鵜住居小学校の生徒・児童が過去の津波災害の教訓を生かして無事避難した、いわゆる「釜石の奇跡」をテーマとした（歌詞を別枠に掲載）。このほか、行方不明の夫を今も探し続け、悲しみに暮れつつも前向きに生きようともがく女性の心情などをテーマに、これまで９作品をつくった。最終的に計10作品で完成とする。

10作目の制作は現在、凍結されている。

地域の復興が成し遂げられたとき、それを祝う10作目の甚句をつくる。その時「復興甚句」の名乗りを自分たちに許すことにした。

「それまで未完のままの『あの日あの時甚句』です」（北村さん）。

いつの時点を復興とするかは、さまざまな見方があるだろうが、二人は「仮設住宅の皆さんが全員、自分の家に入られたとき」とした。歌を通じて一人ひとりの心情に寄り添おうとする、彼女たちらしい考え方だ。

歌でこそ伝えられる震災の記憶

藤原さんは、ステージ上で涙があふれて歌えなくなることがある。甚句に込めた思いを無我夢中で伝えようとしつつも、ふと、震災がもたらした多くの悲しみで胸がいっぱいになるのだという。観客席からは自然に「がんばれー」の声が上がる。その声は、そこに集う全員への励ましのようにも聞こえる。

「歌う方も聞く方も同じ気持ちになってしまうんですね。普段心の底に抑えつけているものが歌によって浮き出てくるみたいです。がまんせず感情を表に出す機会があってもいいんじゃないでしょうか」（藤原さん）

被災者の中には「早く忘れてしまいたい。そっとしておいてほしい」という人もいる。そうした心情に配慮しつつも、二人は「失われてしまった大切なものを歌で残したい」と願っている。

歌でしか伝えられないもの、残せないものがある。また、歌にしかできないことがある。

藤原さんは「歌であえて思い出すんです。歌なら子どもでも大人でも、いつでも好きなときに歌えます。大切なものを、思い出したいときに思い出せます。だから、震災の記録は文字も映像も大事ですが、亡くなった人たちを歌として残したいんです」と語る。自身は歌っているとき、震災で亡くなった兄の存在を感じるという。

直接的な被災の経験がない人にも、彼女たちの甚句は、現地の人が感じた津波の恐ろしさ、家族や友人を失った痛切な悲しみといったものへの強い共感を呼び覚ます。

歌は、人の心に深い感情を伴ったひとつのドラマを展開させる力を持っている。優れたドラマは、時と場所を超えて人から人へと伝えられていく。彼女たちの甚句は、その歌の力をもってして、子や孫へ、その先に続く遠い将来の世代へと、悲しみの記憶を、本物の教訓を、きっと送り届けるだろう。

甚句歌詞

「釜石あの日あの時甚句」第1作目
〈釜石東中学校・鵜住居小学校編〉

よくぞ越えました津波を越えた／嬉し涙の釜石甚句

あの日あの時／甚句に詠めばよ／時は三月十一日の／忘れもしない大震災／千年一度の大地震／誰が思うかあの津波

名所根浜の海岸を／背にして建ったる学校は／あの日津波に襲われて／今は姿は見えずとも／東中学・鵜の小よ

生徒児童の六百人／手に手をとって高台へ／早く早くと声を掛け／我に続けと皆を呼び／生きろ生きろと叫ぶ声／最善尽くして避難して／命を守りし子供達／他人（ひと）は奇跡と言うけれど／日頃の教訓心得よ

一つ、想定とらわれず／二つ、最善つくす事／三つは率先避難せよ／親は子供を信じつつ／子供は親を信じつつ／自分の命を守る事／そこに生まれしこの言葉／『命てんでんこ』

守り守られ生き抜いて／命が命を紡ぎ出す／未来を作る子供達／褒めてやりたや希望の子等よ

▲「釜石あの日あの時甚句つたえ隊」発足のきっかけをつくった岩﨑昭子さん。旅館「宝来館」の女将だ

いがす実践3★特別賞受賞

故郷を慕う歌づくり 作詞で自分を奮い立たせ、仲間を励ます

高橋久子さん
【宮城県名取市】

受賞理由　仲間とともに故郷を慕う活動はさまざまに取り組まれています。そのなかの代表として、高橋さんのパフォーマンスにみんなが感動し、特別賞を設けることとしました。

▲高橋さんの替え歌を歌う、愛島東部応急仮設住宅の皆さん

宮城県名取市にある愛島（めでしま）東部応急仮設住宅の集会所から、「ふるさと～うさぎ追いし～」の節にのって、故郷の閖上を思う歌声が聞こえてくる。

♪アサリ　赤貝　笹かま　魚釣りし　磯の香
景色は今も　目に浮かぶ　忘れがたき　閖上（ゆりあげ）
♪復旧復興を果たして　いつの日にか　帰ろよ
貞山堀（ていざんぼり）に　開運橋　海は　青き　閖上（ゆりあげ）
♪日和山（ひよりやま）へ　上がりて　潮風受けて　祈ろう
みんなの夢がかなうよう　絆でつなぐ　閖上（ゆりあげ）

作詞したのは、ここで暮らす高橋久子さん。閖上出身者が多く暮らす愛島東部応急仮設住宅で、みんなが集まっては閖上を懐かしむ姿を見て、替え歌づくりを始めた。「仮設住宅に支援に来てくださる人たちが『ふるさと』を歌ってくれるのですが、海のそばにある閖上には、うさぎも山もないでしょ。だから、閖上らしく、『アサリ　赤貝　笹かま』と詩にしたの」と高橋さんは打ち明ける。歌詞カードを手に歌うみなさんの声は力強く、ときに涙をそっとぬぐいながら、故郷を慕い歌い続ける。

故郷・閖上への思い

宮城県名取市閖上地区は、およそ7,000人が暮らす活気ある港町だったが、震災による津波で911人が亡くなり、沿岸部の家屋がほぼ流出・全壊するなど壊滅的な被害を受けた。閖上のシンボル、日和山（標高6.3m、海岸から約700m）には、頂上から2.1m上まで津波が浸水した痕跡が残っていたという。閖上漁港前の高橋さんの自宅も、津波で跡形もなくなった。2011年7月中旬に仮設住宅へ入居するまで、市内の実家や仙台市の息子宅に夫婦で身を寄せた。

高橋さんはその間の出来事を、カレンダーや広告紙の裏にメモしている。震災の夜、95歳の母からもらった古着が、どんな高価な物よりありがたかったこと。土台だけになった自宅へ初めて戻った日、ぼうぜんと立ちつくしたこと。新品の家電製品に囲まれた仮設暮らしに、夫と「２度目の新婚生活」と話したこと――書くことが好きな高橋さんにとって、文字にすることで気持ちも少しずつ整理できた。作詞も必然な流れだったといえる。

最初に作った替え歌は、「いなかっぺ大将」の主題歌「大ちゃん数え歌」の節にのった、「閖上数え歌」。「♪ひとつ　日和山で御来光　♪ふたつ　二人で手を合わせ　浜の大漁祈ります…」と、軽妙なリズムにのって、閖上の人ならば誰もが知っている地名や漁港の日常を綴った。一つ完成したら、次々とアイデアがあふれ出した。水戸黄門の歌で「人生転んでまた起きる」、北上夜曲で「閖上慕情」、トントントンカラリと隣組で「仮設の隣組」、南部蝉しぐれで「閖上恋しせみしぐれ」。ときに笑いあり、ときに涙ありの詩。仮設住宅での夜は、大きな喪失感と今後への不安があふれ出して眠れなくなることが多々ある。そういうときこそ作詞をして自分を奮い立たせ、またそれが仲間への励ましにつながった。

「ここの仮設の人は、みんな明るくて元気なの。私はいつも元気をもらって帰るのよ」と、一緒に歌っていたボランティアの女性が教えてくれた。

▲高橋久子さん。「ありがとう」の詩を手に

故郷・閖上への思い

高橋さんは、替え歌以外にも、多くの詩を創作している。その一つ、閖上への恋しさをカモメや灯台、日和山の目線から綴った「閖上へ帰ってこいよ」は、宮城県白石市在住の菊池嘉雄さんの作曲により、2011年12月にオリジナルソングとして完成。その歌を仮設住宅の仲間と歌う姿は、閖上の現状を織り交ぜたDVDにまとめられ、皆さんにプレゼントして喜ばれた。また、これまで支援してくれたすべての人への感謝をうたう「ありがとう」の詩は、支援に訪れる人たちにコピーを手渡して贈るなかで、奈良県の龍王山光明寺住職でシンガーソングタイラーの三浦明利（あかり）さんの手に渡り、曲がつけられて「被災地からのありがとう」として2012年3月にCD化された。2012年11月には、一般財団法人アート・インクルージョン主催の「復興の詩プロジェクト」に応募した詩が優秀作品に選ばれ、松浦真沙さんの作曲により、合唱曲「復興の詩」として被災地の街角で歌われた。

これほどに取り組みが広がったのは、高橋さんの作詞の技量はもちろんのこと、目新しいことに積極的にチャレンジしていく心持ちや、飾らないあたたかい人柄が、支援者の心を動かしたからに違いない。実際に、高橋さんは、閖上出身の被災女性たちが始めたキャンドルづくりを支えるために、結婚式場などにかけあって、不用になったローソクを譲り受けるなど、バイタリティを発揮。震災を語り継ぐ「語り部」としての活動も行っており、NHK現地発「明日へブログ」も執筆中だ。

http://www.nhk.or.jp/ashita-blog/22000/

「メソメソしていても始まらないし、楽しいことが大好きなの」とお茶目に笑う高橋さん。歌をとおして関係の深まった仮設住宅の仲間たちと、集会所で布小物や絵手紙をつくる時間を大切にしている。名取市の災害公営住宅の完成予定は2年後。「しばらくは仮設住宅暮らしが続くので、皆さんどうぞよろしく」と前を向く。

▲高橋さんがつくった布小物たち

◀仮設住宅の集会所は、歌をうたい語り合う拠り処

「ありがとう」　作・高橋久子

鳥のように空を飛んで　ありがとうを届けたい
太陽のような笑顔になって　ありがとうを届けたい
風になって　みんなの耳元にありがとうを届けたい

ありがとう　ありがとう
言い尽くせぬありがとう

ありがとうの「あ」は
あたたかい心　あたたかい食べ物　あたたかい衣類をありがとう

ありがとうの「り」は
りっぱに復旧、復興するために助けてくださった
皆さんにありがとう

ありがとうの「が」は
「がんばって」を声をかけてくれてありがとう

ありがとうの「と」は
とつぜん　なにもかもなくなったけど
世界の人が支援してくれてありがとう

ありがとうの「う」は
うれしかったよ
詩を歌える気持ちが少しずつ出てきたこと
「化粧でもしてみようかなあ」という気分になれたこと
みんなの支えがあったから　ありがとう

いつか恩返しができるかな
「元気でいることが恩返しなんだよ」と言ってくれた

小鳥のさえずりがやさしく聞こえたなら

ありがとうの気持ちを感じてください

雨あがりにきれいな虹が出たら
皆様のおかげで希望を胸に　前に向かって進んでいる
私たちのことを思い浮かべてください

ありがとう　ありがとう
言い尽くせぬありがとう

太陽が朝もやを照らしたら　光とともに
笑顔になっている私たちのことを
暗闇から徐々に朝やけになるように
私たちの心も少しずつ明るくなってきたのを

雲よ　ぽっかり浮かぶ雲よ
鏡になって
風よ光よ届けてほしい

言い尽くせぬ　ありがとうを

雨あがりの虹よ　届けてほしい
世界のみんなにありがとうを

鳥よ　雲よ　届けてほしい
みんなの応援で　前向きになれたことを

月よ　星よ　届けてほしい
みんなの願いが届いて
笑顔が戻ったことを

月よ　星よ　届けてほしい
みんなの願いが届いて
笑顔が戻ったことを

▲高橋久子作詞、三浦明利作曲のCD「被災地からのありがとう」

いがす実践4★活動提案賞受賞

地域の福祉力で復興公営住宅の住民を支える

ボランティア「ぐるーぷ なか」

【兵庫県宝塚市】

受賞理由　阪神・淡路大震災の被災者が、普通の市民に戻っていく過程のなかで、復興住宅の周辺地域の住民が大切にすべきことや必要な支援のあり方を教えてくださいました。東日本大震災のモデルとなる活動です。

阪神・淡路大震災後に建てられた復興公営住宅（災害公営住宅）で、入居者と地域住民の交流の場をつくるべく活動を続けているのが、地域住民によるボランティア団体「ぐるーぷ なか」だ。復興公営住宅のなかにある集会所を利用して、月に1度の喫茶「ほんわか」の開催から始めた活動は、復興公営住宅の住民の暮らしを変えてきた。

地域から孤立する復興公営住宅のために

兵庫県宝塚市の光明小学校区にある「兵庫県営宝塚福井鉄筋住宅」（以下、住宅）は、阪神・淡路大震災で住む家を失った人たちが仮設住宅などから移り住んだ。30戸からなる3階建ての住宅で、そのうちの20戸は高齢者世帯を対象としたシルバーハウジングとなっており、緊急通報システムや生活援助員（以下、LSA）による訪問などのサービスが受けられる。1998年3月から入居が始まったが、入居者がもともと暮らしていた場所は兵庫県下や大阪府下など広範囲で、宝塚市に縁のある人ばかりではなかった。また、若い世代の入居者もそれぞれ生活課題を抱えていて、高齢者や障害のある入居者との支え合いの関係をつくることは難しく、住宅内の共用スペースの管理・運営面の問題から住宅独自の自治会を組織しようとしたが困難を極めた。

当時、隣接地域の担当民生児童委員をしていた中八重子（なかやえこ）さんは、宝塚市の民生児童委員の担当者から連絡を受け、住宅とのかかわりをもち始めることになった。入居住民と徐々に顔見知りになる中さん。あるとき、「選挙の投票に行きたいけれど、投票会場がわからない」という相談を受けた。前日に場所を教えたり、当日一緒に投票会場に出かけたが、「今住んでいる地域を知らないという住宅住民の漠然とした不安を感じた」という。

▲喫茶ほんわかで気の合う仲間と

▲ぐるーぷ なかのメンバー

ちょうどその頃、住宅の自治会長からも、住宅が周辺地域から孤立していると感じていると聞いていたため、中さんは地域で開催している会食に参加するように住宅住民に声をかけた。しかし、高齢や障害のために地域の会食会場に出向くことが難しかったり、母子家庭で働いているために出かけられなかったりと、「地域に出向くのはおつきあいで、来るのは自治会の役員ばかり」という状況だった。

見守り推進員や市社会福祉協議会の地区担当職員からの、「住宅内で交流の場づくりをしてもらえるならあと押ししますよ」という言葉も追い風となり、中さんはボランティア団体「ぐるーぷ なか」を立ち上げた。

専門職との協働

「ぐるーぷ なか」は、住宅内の集会所を活動場所として、2006年より喫茶「ほんわか」を第2金曜日にスタート。翌年には、住宅内でまちづくり協議会によるなんでも相談窓口「和みの場」が第2・4金曜日にスタートし、以後、まちづくり協議会福祉部員、民生児童委員と市社協の専門職が組んで相談にあたっている。

2008年には「ぐるーぷ なか」が、食事会「一日ゆったりの会」を第4金曜日に開始。なんでも相談窓口に、ふれあい交流の事業を組み合わせることで、気軽に相談できるようにすることと、住民の支援者と専門職が協働する場をつくることを企図していた。また、市社協が相談窓口の設置やひろばスタッフの常駐などにかかる会場使用料を払い、共益費の一部を負担している。

2011年より、地域のNPO法人ラポールによる「ミニデイサービス」が第1・3・5金曜日に開始され、「毎週金曜日には、集会所で人が集うイベントがある」という状況ができた。

サロンから絆へ

食事会を住宅で開催するようになって、見守りの力が強くなりました」と中さんは話す。高齢や障害ゆえに自室に閉じこもって地域に出向くことが難しかった人が、食事会をきっかけにして出かけるようになった。それだけでなく、階下の集会室に降りてくることが難しい人でも、「温かいものを温かいうちに」部屋まで届けることができるようになった。食事を届けることが世間話をするきっかけになり、安否確認につながっているのだ。

注目すべきは、これらの活動が住宅の住民だけでなく、周辺地域の住民も対象としていることだ。これは、住宅の住民と地域住民の交流を目的とすることはもちろん、まちづくり協議会の活動拠点を確保し、地域全体の困りごとを掘り起こして共有するという意図もある。喫茶や食事会で世間話をしていると、「こんなことに困っている」というちょっとした声を聞くことがある。そんなときは、必要に応じて民生児童委員や専門職が担当するなんでも相談窓口につなげて、課題の解決に結びつける。専門職にとっても、日常会話のなかから困りごとが聞けるなど、情報収集の場にもなっている。

中さんは、「食事会をしても、今も住宅の住民と地域住民が離れて座っている」ことが気がかりと言う一方で、離れて座れる場所をつくることが「排除しない」ことにもつながっていると話す。食事会に参加した地域の男性が、その後、定期的に住宅を訪ねて住宅住民と囲碁を打つといった交流も生まれている。

現在、毎回の食事会の参加は30〜40人で、近所の宅老所の人も来る。喫茶は25人ほどの利用がある。そのうち、住宅住民の利用は、食事会が15〜20人、喫茶は7〜10人というが、回を重ねるなかで住宅住民の参加が増えている。固定化しがちな参加者だが、今まで来なかった人の参加があったり、地域の人が住宅の住民と親しくなって自宅を訪問するなどの関係も生まれている。

住宅住民にしかできないサポートも

阪神・淡路大震災から19年が経ち、当初から住んでいる人も相応に年を重ねてきた。新しい入居者が入ってきても、なんらかの生活課題を抱えており、住宅住民や自治会を支える担い手になるというよりは、逆に支援が必要な場合が多い。

中さんは、「自治会長の負担は計り知れないが、常時ここにいる人だからこそできるサポートが多いことも事実」と話す。たとえば、「墓参りに行きたいが一人では行けない」という高齢者からの相談は、実際は、近所に住む子どもとの関係が思わしくないため連れていってくれないというのが本当の訴えであった。「私たちが外から介入し、出かけるためにどうするか、という支援を考えてしまうと、親子関係に亀裂が入ってしまう。その人の本心がどこにあり、何をしたいのかを判断できるのは、やはり普段からの人間関係がものをいう」と中さん。このときは、自治会長夫妻が子どもにそれとなく伝えてくれたことで解決できたという。

地域の福祉力向上

喫茶や食事会をきっかけにして、地域住民や専門職とのかかわりが生まれ、新しい人のつながりができる。単なるつながりづくりのきっかけにとどまらず、お互いが挨拶を交わしたり、必要に応じて住民による困りごとの手伝いや、公的サービスの利用につなげている。それは社会的な孤立の防止だけでなく、地域や住宅の住民の福祉力の向上にもつながっている。一軒家ではなく、集合住宅だからこそ、住民同士が打ち解け、地域とのつながりを多くもつことで、「ここで暮らしていける、ここで生きていける」という気持ちが強くもてるようになるのではないか。

中さんは、住宅で中心的役割を果たす自治会長夫妻の健康状態も気にかかっている。しかし、「外から来てすべてをやるのではなく、自治会長夫妻と負担を分かち合って、お手伝いできることを考えたい」と話す。すべてを準備して整えるのではなく、住民にしかできないこと、住民だからできることに寄り添い、支える。そんな姿が息の長い活動を生んでいる。

▲年1回の迎春花づくり

▲代表の中八重子さん

いがす実践5

震災きっかけに失語症者と家族が団結 だれもが普通に暮らせるまち目指す

失語症友の会「はまりゃすぺゃ」

【岩手県大船渡市】

▲失語症友の会「はまりゃすぺゃ」の皆さん

「はまりゃすぺゃ。」

岩手県気仙地方（大船渡市、陸前高田市、住田町）の方言で「一緒にやりましょう」「参加しましょう」「仲間になりましょう」といった意味。このお国言葉を、同地方を主な活動エリアとしている失語症友の会が、団体名として採用した。

失語症友の会「はまりゃすぺゃ」。

メンバーは失語症者とその家族、支援者など約20人。月1度のペースで集まり、ゲームや歌を通じて楽しみながら言葉のリハビリに取り組むほか、失語症に関する勉強会や、バーベキューなどの交流イベントも行う。

メンバーの一人、事務局を担当する村上今子さんは、「障害のためにできること、できないことがありますが、みんなで一緒に楽しんでます。失語症の当事者も家族も支援者も、みんな気を張らずによい関係を保てるようになってきています。いっしょに活動することで本当に、楽しい時間を過ごすことができるんです」と会の活動の意義を語る。

結成は東日本大震災後の2012年5月。

これに先立つ同年2月、気仙地域リハビリテーション広域支援センター（介護老人保健施設「気仙苑」内）の言語聴覚士らが、避難所や仮設住宅、あるいは自宅で生活する失語症者とその家族の交流会を開いた。続いてさらに2回同様の交流会があり、避難所などでさまざまな困難に直面していた失語症者とその家族同士の横のつながりが生まれた。このつながりを継続させ、支え合える場をつくろうという気運が当事者と家族らの間で高まり、友の会立ち上げに結びついていった。

誤解されやすい失語症独特の障害

失語症は、事故や脳疾患などにより脳の言語機能を司る部分が破壊されることで発症する、高次脳機能障害のひとつ。その症状の現れ方は複雑で、人によっても異なる。

聞く・話す・読む・書くといった言葉に関する機能すべてが傷害され、通常の会話を成立させることはむずかしい。筆談もできない。

発語が意味不明な音の羅列になってしまう人がいる一方、相手の話に相づちを打ち、「はい」「いいえ」「そうですね」などと単純な応答ができる人もいる。ただし、会話が成立しているように見えても、本人はその内容はまったく理解していないこともある。障害の程度が軽ければ、多少のぎこちなさはあったとしても、会話を成立させられる人もいる。

言語機能以外の知的能力は失われていない。たとえ意味不明の音声しか出せず、会話を理解できないとしても、意識は明瞭で通常の思考力を保っている。身体的には、脳の損傷の部位、範囲によって麻痺が残るケースもある。

失語症を知らない人には、健常者と誤解されることもあれば、聴覚障害や知的障害、認知症と勘違いされることもある。

こうした誤解やコミュニケーションの欠如は、耐えがたい苦痛に違いない。だからこそ、「障害を少しでも克服しようと、みんなそれぞれ言語訓練などを受けて一所懸命努力しています」と、村上さんは強調する。

失語症者とのコミュニケーションのコツは、村上さんによると「絵や写真を使ったり、短い言葉でゆっくり話したりすること。それと、文字の場合はひらがなより漢字の方が意味が伝わりやすい」とのこと。

失語症について詳しく知らなくても、そうした病気があることだけでも広く知られていれば、地域社会で暮らす本人と家族の心理的負担はかなり軽減されるだろう。

気仙地域リハビリテーション広域支援センターに所属する言語聴覚士の古川翠さんは、次のように説明する。

◀歌による言語訓練の様子

「失語症という病気を少しでも知っていれば、当事者に出会ったとき『こういうことで困っているんじゃないか』と自然に配慮がなされるのではないでしょうか。失語症の人たちは基本的に家族の付き添いがないと行動できません。幾分かでも失語症について知っていれば、当事者が一人で外に出て困っているのを見かけたときに、話しかけるにもその話しかけ方とかが違ってきます。失語症の人も、相手が自分のことを分かってくれていると感じれば、あまり緊張せずにいられます」

▲専門家を招いての失語症に関する勉強会

震災があぶり出した失語症者の困難

東日本大震災は、平穏な日常に覆い隠された障害者の生きづらさ、健常を前提とした社会の冷淡さを、障害者とその家族、介護・福祉関係者らに改めて印象づける契機となった。

村上さんとともに事務局を担当している西條憲子さんは、震災直後、失語症の夫と地元の中学校に避難したときの経験を次のように語ってくれた。

「食料品の配給があるとか、入浴施設に行くバスが出るとか、放送などで知らされても、その意味を理解できないんです。健康相談があっても、自分では名前を言えないため行くのをためらったり。失語症という障害とその特徴を知っている人の付き添いがないと、家の外ではいろんな困難があります。避難所ではなおさらです。混乱した状況ですし、まわりは見ず知らずの人ばかりですから」

言語訓練を重ね、家庭のなかで家族とのコミュニケーションがおおむね良好となっても、地域のなかに失語症について知る人が少ない状況では外に出て活動するのは簡単ではない。

被災障害者の支援にあたっている「大船渡地区サポートセンター鴎（かもめ）」所長の金野千津さんは、当事者の心理をこう説明する。

「相手に伝えたいことがあっても、うまく発語できなかったり、相手に自分の真意をくみ取ってもらえないために、伝えるのをあきらめてしまうことが多いんです。東北人気質ということもあるんでしょうか、自分が我慢すればいい、ということになってしまう」

失語症の人は、どうしても家に閉じこもりがちになる。個人の性向や気質も多少影響するだろうが、どんなに外向的な人物でも失語症になれば人づきあいには臆病にならざるを得ないだろう。

古川さんは、「そもそも被災しなかったとしても、失語症の人たちは大きな困難を抱えていました」と指摘する。震災による避難所暮らしはそうした傾向を強めた。

「周囲の人たちとうまくつきあえず、人と会うのが怖くなってしまう人もいます。被災でより一層、知らない人たちに囲まれて、しかも失語症について理解のない状況にさらされました。家族にとっても、避難所では家にいるときと違ってずっと付き添っていなくてはならず、負担は大きかった」（古川さん）

障害があっても暮らしやすいまちへ

暮らしやすい地域、だれもがいつまでもいきいきと生活し続けられる地域のあり方は、障害者の目線で見えてくる。

はまりゃすぺゃ結成の当初のねらいは、避難所や仮設住宅での経験を踏まえ、失語症の人とその家族が、被災の有無を問わず地域のなかで団結し、生活上の困難を少しでも改善していくところにあった。

現在目標に掲げるのは、第一に当事者と家族、支援者が悩みを相談し合い、支え合うこと、そして同じ悩みを抱える人たちに一人でも多く会に加わってもらうこと。第二に少しでも失語症についての理解を広めていくこと。

村上さんは「介護や福祉の専門職でなくても、失語症に一定の理解があるボランティアの助けがあれば、状況はかなり違ってくると思います」と強調する。

理解を広めるため、会のイベントや勉強会を一般の人にも開放するなどし、少しでも失語症について知ってもらう機会をつくることを検討中だ。「障害者も高齢者も子どもも普通に暮らせるまちを本当に実現するために、今後積極的に情報発信していく必要を感じています」と村上さん。

少しずつ、支え合いの輪を家庭から社会へと拡げていく。それが沿岸被災地のよりよい復興にもつながっていくだろう。

▲季節ごとに楽しいイベントも（サンマ焼きバーベキューの様子）

いがす実践6

認知症は地域で支え合い 仮設住宅で寸劇上演も

認知症にやさしい地域支援の会

【岩手県陸前高田市】

▲認知症にやさしい地域支援の会のメンバーの皆さん（前列左から2人目が菅野不二夫会長）

認知症介護家族のための交流と支え合いの場をつくろうと、2007年4月、岩手県陸前高田市で「認知症にやさしい地域支援の会」が結成された。以来、会のメンバー11人が地域のなかで交流会などを開き、認知症介護の当事者、関係者をはじめ認知症に興味を持つ人たちに、正しい知識を身につけ、悩みを相談し合える貴重な場を提供。特に認知症の特徴的な症状と上手な対処の仕方を示したオリジナル寸劇は好評を博している。

会長の菅野不二夫さんは、「介護の悩みを抱えて自殺したり、認知症の人を殺してしまうなど悲惨な事件が何度も起きている。介護家族が集まって悩みを話し合い、同じような立場にあるのは自分だけではないとを知るだけでも、だいぶほっとするんです」と活動の意義を説明する。自身も22年間、母親を在宅で介護してきた。ほかのメンバーも長年、認知症介護を実践してきた人たちばかり。介護家族が抱える問題をよく理解し、どんな支援が必要か経験を踏まえて親身にアドバイスできる。介護家族の支援だけでなく、一般市民への認知症に関する啓発にも注力している。

参加者は震災後増加傾向

主な活動は、月1回の認知症カフェ（奇数月が家族交流会、偶数月がサロン活動）、年3回の介護などに関する講習会、年1回の認知症についての専門家による講演会など。

家族交流会は少ないときで30人前後、多い時で70人ほどが参加する。講習会は50人前後が参加。講演会には250人が集まったことも。これらイベントには、県内だけでなく隣県や、遠くは東京都、愛知県などからも参加者が集まる。

東日本大震災の発生前と比較すると、総じて震災後の方が認知症に対する市民の関心も高まっているようで、交流会などへの参加者は増加傾向にある。また、交流会では認知症の当事者と家族がいっしょに参加する場合が多くなっているという。外に出て人とふれあい、会話や軽体操、歌などを楽しむことが認知症の症状改善につながったり、進行を遅らせたりするのに役立つという認識が広まりつつあるのかもしれない。

震災後も自宅で交流会継続

震災では、会が活動拠点としていた公共施設が被災し使用不能となった。菅野さんは、震災後の混乱のなかでも介護家族の支援を継続できるよう、自宅を改修し集会に使えるスペースを整備することにした。自宅も津波による浸水被害を受けるなどしたが、構造的には問題がなく、修繕と改修を行えば居住や集会に使用可能な状態だった。

「公共施設の復旧を待っていたら、再開まで数年を要する可能性がありました。それでは介護家族が地域のなかで孤立してしまいかねない。それだけは避けたかった」（菅野さん）

たまたま同じ避難所に身を寄せていた知り合いの宮大工に工事を頼み、いち早く着工できた。震災から4か月後の7月には改修を終え、自宅での交流会開催にこぎ着けている。

現在は自宅のほか、NPO法人福祉フォーラム・東北（陸前高田市）が管理運営する交流施設「朝日のあたる家」（2012年2月開所）を活動拠点として交流会などを開く。

また、地域包括支援センターや市社会福祉協議会らと協力し、仮設住宅集会所などで開く認知症サポーター養成講座で、認知症寸劇の上演や悩み相談、歌の会などを行っている。

仮設住宅では、閉じこもりがちになる高齢者が多く、認知症の初期症状が現れたり、症状が重くなる人も少なくない。こうした状況を踏まえ、寸劇の新しい台本をつくった。テーマは「閉じこもった夫婦」。震災後に仮設住宅で暮らす夫婦が主人公だ。

▲認知症家族交流会での軽体操の様子。介護者だけでなく認知症の当事者も参加している

▲認知症の症状や対処法について示す寸劇

寸劇で認知症予防訴え

夫は震災前から物忘れをするようになっていたが、仮設住宅で暮らすようになって症状が悪化。朝なかなか起きられず、感情は不安定になり、隣近所との交流も途絶えがちに。妻は夫にいらだちを募らせていく。

このような悪循環に陥らないためにどうすればいいかが、劇の後半で演じられる。

なかなか起き上がらない夫に、妻は天気がいいから布団を干すと言って起床を促す。食欲がないと言われれば散歩に誘う。散歩中は住民と気軽に言葉を交わす。日常的な会話のなかでお互いの健康状態が話題に上る。

「なんかねえ、震災後、2〜3軒先の柴田さんも元気がなくて、だんなさんみたいだったけど、このごろデイサービスに行ってるみたいですよ。一週間に2〜3回かなあ。そしたら顔色もよくなって元気になったっけねえ」という具合だ。散歩から家に戻ると、夫は食欲があり食事ができるようになっている。

寸劇は次のような呼びかけで終幕となる。

「家のなかにばかりいて憂うつな夫婦でしたが、人と関わることによって少しずつ元気が出てきたようです。今、各仮設住宅にはお茶っこ飲み会といったサロンがあります。外に出てこういった活動に参加してみてはいかがでしょうか。ストレス解消になり、また、友達もできます。毎回でなくてもいいので、体の調子のいいときに外に出てみましょう」

実体験を基にさまざまなシナリオ

台本も舞台道具も同会メンバーの手作り。俳優もメンバーが務める。セリフは基本的に地元の方言で語られる。認知症介護の実践経験を踏まえて演じられるだけあって、その演技や演じられる内容には説得力がある。

「閉じこもった夫婦」のほか、これまで制作したものとして、食事をとったことを忘れてしまう症状を扱った「ご飯戦争」(他団体の脚本をアレンジ)、運転免許の自主返納をテーマとした「クルマの免許」、「排せつ介助」などがある。これらは交流会や認知症カフェ、講習会、講演会などの際に上演されてきた。

「寸劇はわかりやすいだけでなく、専門家の講演、講習などより親しみや興味を持ってもらえるようです」(菅野さん)

仮設住宅団地でのサロン活動などで共通する課題として、「活動に出て来られる人はまだまだしで、そういう気力さえない人、関わり合いを拒もうとする人の方がむしろ心配」(支援関係者)である。

寸劇は、集会などを避ける傾向のある人の抵抗感を和らげるかもしれない。一度でも同会の交流会や介護予防の講習会などに参加すれば、和やかな雰囲気のなかで同じような境遇の人たちと知り合い、認知症などに関する正しい知識も得られる。交流会などは行政や地域包括支援センターなど関係機関と連携し、介護の専門職らも参加。介護予防の軽運動・体操などの指導を行うほか、相談にも応じる。

▲お茶っこ飲みは交流会参加者の大きな楽しみのひとつ

取り組みの広がりに期待

菅野さんは、高校の元音楽教師。交流会での歌や発声の指導で本領を発揮する。退職しているとは思えない張りのある声で歌唱をリードする。その声に促され、認知症の人も含め、交流会の参加者が大きな声で歌を歌う。その姿はとてもいきいきとして表情が明るく、印象的だ。

ほかのメンバーの経歴は保健師、看護師、郵便局員、ケアマネジャー、就活アドバイザー、介護施設の評価調査員などさまざま。共通しているのは認知症介護の経験と、定年退職した後も同会の活動をはじめ、地域のために何かしら役割を持って活動しているという点だ。

認知症の人を在宅で介護する人たちが、その家族を看取った後、こうした支援活動の担い手になってもらう枠組みがあるだけで、高齢者の暮らしやすさ、介護家族の負担軽減に資するところは極めて大きい。

その活動の意義と、震災でも活動を途切れさせなかった熱意がひとりでも多くの人に理解され、地域の支え合いのモデルとして広がることに期待したい。

いがす実践7

町の未来、笑顔で描こう 岩手県大槌町にご当地ヒーロー登場

大槌町青年団体連絡協議会
【岩手県大槌町】

▲イベント会場（おおつち鮭まつり）に現れたホウライレッド。日常の仮の姿は大槌町青年団体連絡協議会のメンバー

軽快な音楽に乗ってステージに駆け上がる戦隊ヒーローの3人。

「真っ赤に燃える勇気の力、ホウライレッド」「青空にかける希望の橋、ホウライブルー」「光り輝くみんなの未来、ホウライイエロー」

「三人合わせてホウライオー！」

敵は自然界の魔物、地面を揺らすシンドロックと、津波を引き起こすウェービー。ある日突然町にやってきて子どもたちを脅かす。

「おまえたち、こんな低い場所にいていいのか。もっと高い場所に逃げないと、おまえたちの魂はすべておれさまのものになるのだ」

子どもたちの魂を奪おうとする魔物を、防災戦隊ホウライオーが〈きずな〉パワーで撃退する。

岩手県大槌町の町青年団体連絡協議会（小林宣久会長）に所属する5人の若者が、ご当地ヒーロー「防災戦隊ホウライオー」で町の人びとを元気づけようと思い立ったのは2012年の春のこと。その後、支援団体カリタスジャパンからの資金援助が決定、さらにさまざまな企業・団体、個人が協力を申し出た。コスチューム制作は㈱ぴーぷる、音楽は遠野市で活動するバンド「音工房」、作詞と振り付けは同市の飲食店「ややこしや」の店主、全体的なプロデュースをNPO法人遠野まごころネットの理事長が担当した。こうして同年8月にはショー初上演にこぎつけた。

以来、月1～2回のペースで商店街や各種イベント会場で公演。12月に開かれた町主催の「おおつち鮭まつり」では、伊豆大島とフィリピンの台風被害者支援の募金活動を行った。

2014年に入ってからも、1月に町の成人式に、2月に地元ショッピングセンターでの豆まきイベントに出演するなど大人気。今後は幼稚園・保育所でも上演したい考えだ。

協議会のメンバー5人は、忙しい仕事の合間を縫ってリハーサルを重ね、ショーに臨む。

メンバーの一人で事務局を担当する川端伸哉さんは、町社会福祉協議会の職員。川端さんはホウライオーについて、「基本的には町の人や団体を応援するためのもの。たとえば、花壇整備のボランティアを募るとか、商店の販促イベントとか、戦隊ヒーローが来れば親子連れの参加が見込めます。にぎわいをつくるためのツールというわけです」と説明する。

にぎわい創出はご当地ヒーローに期待される重要な効果ではあるが、ホウライオーを誕生させた真のねらいはほかにある。

「子どもたちを元気にしたい、みんなに笑顔を届けたい。そして町への愛着を持ってもらいたい。ホウライオーを見て子どもたちが元気になれば、家のなかが明るくなるでしょう。すると大人たちも元気になる。大人が元気になれば町も元気になるわけです」（川端さん）

不安抱えつつ「自分たちにできること」を

町は、東日本大震災の強い揺れと津波によって甚大な被害を受けた。家屋の被災棟数は全半壊3,700棟以上、犠牲者は1,284人（震災関連死も含む）に上る。

町の人口は震災前の2011年2月末で1万5,944人。これが3年後の2014年1月末では1万2,738人と、3,000人以上減っている。震災で多数の犠牲者が出たうえ、新しいまちづくりを待たずに他市町村へ転出してしまう動きも目立つ。町に未来はあるのか。このままでいいのか。不安と焦りが募る。

▲大槌湾に浮かぶ「ひょっこりひょうたん島」こと蓬莱島（ほうらいじま）。ホウライオーはここからやってきたという設定

「自分たちにもできることをして、何とか町おこしをしたい」。そうした思いが、ご当地ヒーローのアイデアの背景にあった。

ショーは、今年2月までに10回以上こなしている。週に1度、仮設住宅の集会所で稽古を重ねるが、その動きにはぎこちなさも残る。

「みんな素人ですから。でも、町の役に立ちたいという一心でやっています」（川端さん）

「ホウライオーの名称は、大槌湾内に浮かぶ小さな無人島「蓬莱島（ほうらいじま）」に由来する。島は真ん中がくびれてひょうたん形をしており、「ひょうたん島」の愛称で町民に親しまれている。NHKで放映された人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルになったという説もある。

大槌町が2011年12月に策定した「町東日本大震災津波復興計画」の基本計画の冒頭で、碇川豊町長がこう表明している。

「ひょっこりひょうたん島の主題歌にあるような『苦しいこともあるだろさ、悲しいこともあるだろさ、だけど僕らはくじけない』の精神で、町民一丸となって前に進んで参りたいと考えています」

ひょうたん島こと蓬莱島は、町民の復興への決意を示すシンボルともなっている。

ホウライオーはこの蓬莱島からやってきた、町民を守る防災の戦士。

「なぜやってきたかって？　それは最近、自然界の魔物たちがこの辺に現れるらしい。その魔物たちからみんなを守るためにやってきたんだ」（ショーのセリフより）

ホウライレッドは火事から、ブルーは津波から、イエローは地震から、それぞれ町民を守る力を持っている。

一方、悪役「シンドロック」は地震を象徴する魔物。その名は東日本大震災の揺れの大きさ「震度６」をもじったものだ。揺れを引き起こす巨大なハンマーを振り回し、町民に悪さを働く。同じく「ウェービー」は津波の魔物。名前はもちろん波を意味する「ウェーブ」から来ている。

▲大槌町の市街地は津波で壊滅的な被害を受けた（2013年12月1日撮影）。ホウライオーは住民に笑いと元気を届けたいという若者の願いから生まれた

子どもたちはヒーローが大好き

「もしもその魔物たちが悪さをしに来たら、大きな声でホウライオーって叫んで」（同）

ヒーローたちがいったんステージ袖に姿を隠すと、替わって悪役が登場。すると子どもたちは「ホウライオー」コールを繰り返す。

ヒーロー再び登場。初めのうち魔物が引き起こす地震と津波にたじたじだが、「みんな、おれたちにパワーをくれ…（中略）…みんなのパワーを集めれば、こいつらを一撃で倒すことができるんだ」と観客席に向かって呼びかける。すると再び子どもたちから、「ホウライオー」コールがわき上がる。それが〈きずな〉パワーとなって魔物を追い払う。

魔物は「今回だけは負けを認めよう。だがな、次はわからんぞ。またいつか突然現れてやるから、覚悟しておくんだな」と、捨て台詞を残して去って行く。

ホウライオーは防災を標榜しているものの、震災の教訓を後世に、などと大上段に構えるところがない。むしろそこがいい。

▲ヒーローといっしょに記念写真。イベント会場ではおなじみの光景だ

▲ホウライオーがそこにいるだけで、大人も子どももみんな笑顔になる

セリフも振り付けもＢＧＭも、いかにも戦隊ものらしいベタな感じで、大人が見ればそのクサさに思わず笑ってしまう。

一方、子どもたちは、派手な動きと衣装、不気味な悪役の姿に目が釘付けだ。

ヒーローたちがステージから降りてくると、子どもたちが駆け寄っていく。ホウライオーのまわりはいつもにぎやかで、笑顔があふれている。その様子を見れば、ヒーローへのあこがれが、確かに子どもたちに勇気を与え、その目を輝かせていることがわかる。

実は、ホウライオーは本来５人組の戦隊として企画されている。予算の都合で、復興を後押しする「グリーン」と、町内にある風車を象徴する「ピンク」をつくれなかった。

協議会のメンバーが５人しかいないのもネックだ。コスチュームがそろっても、悪役２人を入れて総勢７人の「フル規格」でショーを行うことができない。

「メンバーは募集中。町民でなくとも大槌に思いを寄せてくれる人なら、町外でも県外でもメンバーになれますよ」（川端さん）

人が足りないこと以外にも、コスチュームの制作や維持、ショーの上演にかかる費用は頭の痛い問題だ。少しでも活動費を賄うため、今後グッズ販売にも乗り出す予定という。

「缶バッチ、ピンバッチ、ステッカーなどをつくる計画があります。バッチは親子そろってつけてもらいたいですね」（川端さん）

息の長い活動を望みたい。ホウライオーは、大槌の海に浮かぶ小さな島、蓬莱島の上に立つ灯台のように、暗く沈みがちな人びとの心に一条の光を送り届けることができるのだから。

いがす実践8

子どもの権利と育ちを応援する社会づくり

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

【宮城県仙台市・石巻市】

▲セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(SCJ)の皆さん

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(以下、SCJ)は、東日本大震災以降、東北地方にも拠点を構え、子どもの権利を基盤とした「子どもの保護」「教育」「子どもにやさしい地域づくり」「コミュニティ・イニシアチブ」「防災」「福島」を柱とする復興支援事業を続けている。

石巻市「地域の遊び場づくり」とは

これらの活動の一環として、SCJは子どもが安心・安全に遊び、学び、成長できる「場」をつくり、子どもたちの日常性の回復を目指している。活動を続けるなかで「乳幼児の親子が集まれる場所が少ない」「乳幼児を育てる親同士のつながりがほしい」といった声が聞かれるようになった。そのため、2012年9月より宮城県石巻市の仮設住宅集会所を拠点とし、仮設住宅とその近隣に住む乳幼児と養育者が気軽に集まれる「地域の遊び場づくり」事業を開始した。活動は月に1回程度を定期活動とし、近隣の親子にも声をかけながら、約1年にわたり継続された。

子どもの発達に関する視点を取り入れた5つの遊びの紹介に加え、養育者が中心となる乳幼児期の子どもたちの遊び場づくりのヒントをまとめた「あそびのレシピ」を2013年12月に発行。以来、子育て中の養育者や子育て支援団体、児童館などの子育て支援機関を中心に配布されている(無料)。イラストが豊富でわかりやすいこのレシピは、「みんなで集まった時、どんな遊びをしてよいのかわからない」、「子育てサークルで提供できる遊びの幅を広げたい」という養育者や子育て支援関係者の関心を呼んでいる。また、「普段子どもと過ごすばかりで、大人と話す時間が欲しい、「遊び場や子育てサークルはどうやって立ち上げたらいいの？」というような声に応え、在宅で乳幼児を育てる養育者の孤立を防止する役割も果たしている。

乳幼児期の子どもたちの遊びの幅を広げるために

東日本大震災の影響により、子どもの遊び場や居場所は大きく減少した。とりわけ、幼稚園や保育所に通わない子どもの屋内・屋外の遊び場や養育者の交流の場は極めて限られていた。こうした背景から、SCJは、宮城県石巻市の養育者と、3か所の仮設住宅の集会所で定期的に集まり、子ども同士がのびのびと遊んだり、養育者同士が気軽に情報交換や交流をしたりする機会を設けた。

活動では、日常生活のなかで乳幼児期にさまざまな遊びにバランスよく出会うことが重要と考え、SCJが2011年の春まで避難所で実施した子どもの遊び場(通称「こどもひろば」)でも大切にしていた5つの遊びの考え方を取り入れた(右の表を参照)。それぞれの遊びを得意としている団体がプログラムを提供し、養育者と子どもたちが一緒に楽しみ、体験できる遊びの場づくりが進められた。発達の視点から遊びを見直すことで、養育者の「なるほど！」、「子どものすることひとつひとつに意味があるのね！」といった新しい気づきは、グループで集まって遊ぶ時はもちろん、家庭で子どもと遊ぶ時に役立ち、子どもの成長につながっていくと考えられる。5つの遊びの内容は、下記の図のとおりである。

5つの遊び

1 からだを動かす遊び
　ふれあい遊び、体操など
2 想像する遊び
　読み聞かせ、わらべうた、手遊びなど
3 創作する遊び
　絵、粘土など
4 手をつかった遊び
　パズル、積み木、ブロックなど
5 コミュニケーションを用いる遊び
　楽器遊び、参加型読み聞かせ、まねっこ遊びなど

養育者グループの交流のきっかけづくり

「地域の遊び場づくり」事業では、養育者の交流も大切にされている。石巻市内には、3つのグループが立ち上がった。定例活動は、養育者グループによる自主的な活動となるように、進められた。SCJは、前述の遊びのプログラム提供に加え、3つのグループが一堂に集まり、情報交換をするための交流会を企画・実施した。交流会では、各グループで現在どんな活動をしているのか、今後どんな活動をしていきたいのかなどについて、グループ間で話し合った。参加した養育者からは、「情報交換の機会になってよかった」、「他の活動地であっても『やっぱりそうだよね』と共感し合えてよかった」、「養育者同士が今日のように集まることが大切」といった前向きな声が聞かれた。

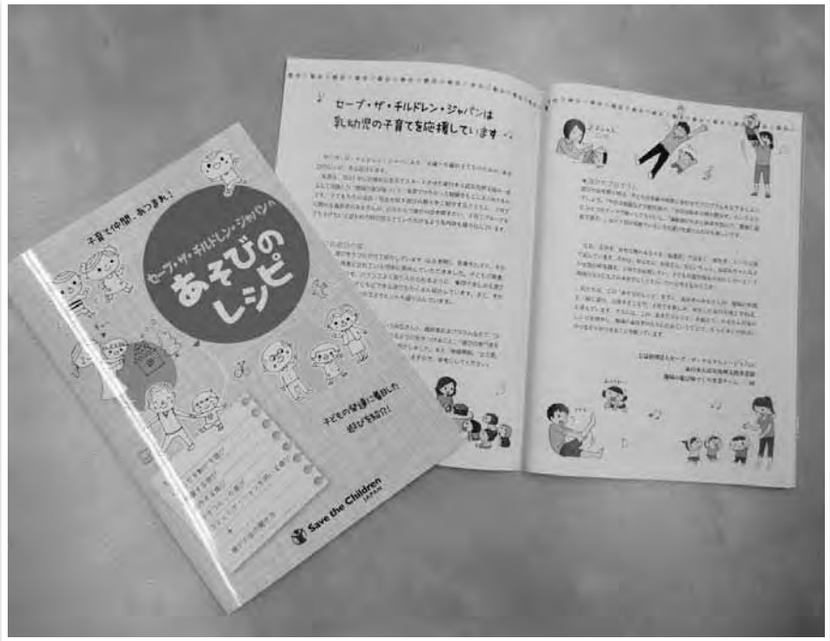
また交流会を始めた当初は、人数の多さや場所の広さに慣れなかった子どもたちも、徐々に遊びに集中し、子ども同士の交流を楽しむ姿が見られるようになった。会の終わりの時間になってもなかなか遊びから戻らない子どもたちの様子を見た養育者からは、「仮設住宅の集会所は狭くて走り回れないが、ここは会場が広く子どもたちも久々に楽しそうだった」、「子どもたちはとても楽しい時間を過ごしたと思う」という感想があった。

「あそびのレシピ」の作成

この事業の経験をまとめた「あそびのレシピ」は、子どもたちの成長・発達を促す遊びの数々を紹介するとともに、「養育者自身で遊びの会を開いてみたい」、「子育てサークルを始めてみたい」と思った時に役立つヒントを盛り込んでいる。

2部構成であるこの冊子は、前半で子どもの発達段階に合わせて、「からだを動かす遊び」、「想像する遊び」、「創作する遊び」、「手をつかった遊び」、「コミュニケーションを用いる遊び」の5つの遊びを掲載している。具体的には、「スカーフを使って想像力を高める遊び」や「年齢ごとのおすすめの絵本」など、集団でまたは家庭で手軽にできる遊びを紹介している。後半は、自分たちで遊びのグループを始めたり、子育てサークルを立ち上げたりしてみたいという養育者を対象に、運営や活動のプログラムづくりに役立つ情報などを、具体的な事例をあげながらわかりやすく紹介している。初めて子育てをする人も、子育てのベテランも、子育て支援などの関係団体も、乳幼児期の子どもに関わる人であれば誰でも活用できるように工夫されている。この「あそびのレシピ」を手にした養育者たちが、地域の仲間と一緒に子育てを楽しみ、もっと多くの出会いやつながりが広がることが期待されている。

▲スカーフを手に自由に動いてみよう！



▲イラストがたっぷりの「あそびのレシピ」

▲手遊びや絵本、紙芝居を楽しむ

▲親子で集える居場所

いがす実践9

地域全体で子どもたちの暮らしを考える

特定非営利活動法人みやぎ子ども養育支援の会

【宮城県仙台市・石巻市】

▲みやぎ子ども養育支援の会の皆さん

2011年3月11日に発災した東日本大震災。宮城県石巻市で住職を務める木村考禅（こうぜん）さんは、知人から届いた物資を配布するため、連日避難所へと足を運び続けていた。物資を届けるなか、木村さんが目にしたのは、両親が見つからないまま避難所で暮らす子どもたちの姿。

子どもたちのそうした状況を肌で感じたのはそのときだけではない。各地の住職たちが被災地域にて傾聴活動を行う移動式喫茶店「カフェ・デ・モンク」の一員として、被災した住民たちに寄り添い続けるなか、震災孤児・遺児に関するさまざま課題があることを痛感した。

穏やかに過ごせる地域を

「石巻市には児童養護施設がなかったんです。そのため、震災以前から、石巻を離れなくてはならなくなった子もいました。また、震災によって孤児・遺児児童を預かった親族里親の多くは祖父母なんです。子どもたちの養育を決意したものの高齢であるがために、養育に対し負担や悩みを抱えているのだということを、涙ながらに打ち明けてくださった人もいました」そう話す木村さん。こうした課題は一時のものではなく、これからもどんどん増えていくだろうと感じていたという。

また、子どもに対しての課題は家族を失った子どもたちだけではなく、仮設住宅などに入居することになった子どもたちにも降りかかっていた。時期的な問題も起因し、仮設住宅の敷地内でにぎやかに遊んでいると、大人から苦情が入ることも。それにより、子どもたちはのびのびと遊ぶことができない。そして子どもたちの親もまた、そうした現状に心苦しい想いを抱いていた。

本来、子どもは保護者の温かい愛情のもと、家庭生活を経験し、心身ともに豊かに成長していくもの。しかし、震災を含め、さまざまな理由により、そうした暮らしを送ることが困難になっている子どもたちは少なくない。こうした子どもたちに、家庭に代わる養育環境や心身のケアを行う環境を、社会全体のなかで充実させていかなければならないのではないかと木村さんは話す。「子どもたちの養育・支援を目的とした活動を行うとともに、地域に暮らす人たちに対して、子どもの健全育成に関する普及や啓発事業を継続的に行うことが、必要なのではないかと感じました」と続ける木村さん。

どのような状況に立たされていたとしても、子どもたちには愛情のこもった家庭的な暮らしを送ってほしい。子どもも家族も、穏やかに過ごせる地域をつくらねば。そう考え、2011年11月、木村さんは任意団体みやぎ子ども養育支援の会を設立。カフェ・デ・モンクの開催日に一時託児を引き受けたり、仮設住宅訪問や相談事業をみやぎ子ども養育支援の会の子ども支援活動として続け、2012年4月、特定非営利活動法人として認証。本格的に活動を始動させた。

▲にこにこ工房の作品

当たり前の日常

法人発足時に掲げた事業計画は4つ。「ファミリーホーム」「相談事業」「子育て支援事業」「地域啓発・障がい児支援事業」だ。地域福祉への貢献を目指し、みやぎ子ども養育支援の会ではこれら4つを一つの事業として捉え、活動を進めている。

2012年6月に開所したファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）[注1]「子どもの家きむら」では、現在も数人の子どもたちが木村さんの家族や法人スタッフとともに生活を送っている。ファミリーホームでの出来事をつづったブログには、一緒にご飯をつくったり、誕生日にはみんなで誕生日会、お休みの日にはときどきお出かけをしたり・・・といった、日常の様子が書かれており、写真や文字から感じられる、ゆったりとした穏やかな様子に、こちらまで胸がほっとなる。当たり前に感じる日常。そうした普通の暮らしこそが子どもたちの成長には本当に重要なのだと、改めて感じさせられた。

もとからの知り合いでも顔見知りでもない子どもたち。その子どもたちの暮らしを預かること、共有することに、当然たいへんさを感じることはある。けれども、一緒で暮らすなかで見える子どもたちの笑顔や成長は、何にも代えがたい大きな喜びだ。

地域全体を見つめる

2012年7月からは、2つのサロン活動も開始。育児に関する情報交換ができる集いの場を提供し、子育てを支援するサロン「にこにこコミュニティサロン」と、子どもたちの遊び場を提供する「にこにこクラブ」だ。

にこにこコミュニティサロンは、市内にある河南地区農村環境改善センターを会場に毎週1～2回開催。子育てを行っている家族だけではなく、子育てを終えた地域住民も交えての集いの場にもなっており、100円の参加費で付くお菓子と飲みものも、訪れた人たちの交流に弾みをつける。託児を兼ねてということもあり、日々子育てや家事に励むお母さんたちが一息つく時間にも。

▲右）イメージキャラクターの「にこちゃん」

また、市内の多目的施設「遊楽館」で行われる子どもたちの遊び場、にこにこクラブには、未就学児から小学校4、5年生を中心とした子どもたちが参加。当初にこにこクラブは、仮設住宅を含む地域のなかで自由に遊ぶことができない状況にあった障がいをもつ子どもたちを対象にした遊び場として立ち上げたのだが、今では障がいの有無にかかわらず、子どもたちが関わり合う場に。凧揚げやクラフト、ボールプールなど、思い思いに遊びを満喫している。

どちらの活動からもわかるように、子育て中の家族や障がいをもっている家族に焦点を当てながらも、決して支援の幅を限定していない。そうした、地域全体で交わることに重きを置く視点は、多くの活動にとって大切なものだ。

子どもたちの未来を考える

そうした一つのプロジェクトの活動で見えた課題は、ほかのプロジェクトとも連動する。みやぎ子ども養育支援の会が行う「にこにこ工房」もそうしたものの一つだ。「サロンに集まった人たちのなかに、発達障害や軽度の知的障害のお子さんをもつ親御さんもいたんです。いろんなお話を伺うなかで、そうした子どもたちが将来地域で働ける場を、子どもだけでなく、親御さんも含めた大人も支えられるような就労支援の場をつくれるといいなと考えました」と、木村さん。現在、にこにこ工房では、発達障害のある子どものお母さんがスタッフとして働いている。週に1度、革製品のデザイナーによる指導を受け、作品づくりに励んでいる。

今後の活動について、木村さんは次のように話す。「今、石巻では、震災孤児や遺児のみならず、社会的養護が必要とされる子どもたち、子育てに携わる養育者への支援も必要とされています。今後は、復興するまちの次世代を担う子どもたちの居場所をつくり、地域福祉への貢献を目指したいと考えております。活動をとおして地域の人たちがより密接にかかわり、思いやりをもって笑顔で暮らせる社会の実現に寄与していきたい」。

▲たくさんの子どもたちが集う遊び場

注1　ファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）は、児童養護施設、里親制度と並ぶ新しい児童養護のかたちとして2009年4月に制度化されました。里親は夫婦か片親で育てるのに対し、親となる養育者を3人以上置いてすることが条件となります。一般の住宅で開設できますが、預かる児童の定員は5、または6人で、養育里親が同時に預かることができる人数（4人）より多く、職業として運営できることが里親との違いです。

いがす実践10

女川で木工製品などの工房立ち上げ 高い品質とデザインでブランド化目指す

株式会社onagawa factory「小さな復興プロジェクト」

【宮城県女川町】

▲魚をかたどった木製のキーホルダー「onagawa fish」(オナガワ・フィッシュ)

魚をかたどった優美な流線形のフォルム。なめらかに仕上げられた木肌の美しさ。触れてみればかすかな木のぬくもりと、微妙な曲面のやさしい手触り。

「onagawa fish」(オナガワ・フィッシュ)。

魚を模したこの木製キーホルダーは、東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた宮城県女川町で生まれた。「魚が獲れないなら、獲れるようになるまで木で魚をつくってしまおう。そうしたコンセプトに基づく。

発案者は湯浅輝樹(ゆあさてるき)さん。

震災後まもなく株式会社onagawa factory(オナガワ・ファクトリー)を立ち上げ、併せて「小さな復興プロジェクト」の実行委員会を組織。損壊を免れた町内の水産加工場を借りて、震災から2か月後の2011年5月、木工製品の工房を開いた。働くのは全員地元の被災者。

なぜ、海と魚のまち女川で木工なのか。湯浅さんは次のように説明する。

「このまちの漁業、水産加工業に依存する産業構成を少しでも変えたいと考えました。漁業と水産加工では、津波災害に太刀打ちするのは難しい。これまでにない産業の構築が必要だと思うんです」

漁港と背後地の水産加工団地に大きく依存する地域経済。そこに少しでも多様性がもたらされれば、将来再び津波被害を受けても経済の再生がより速やかに行われ、人口流出もくい止められるかもしれない。家も仕事も失った被災者が必要とする働く場を確保するとともに、まちの産業構造を変革し災害に強い経済へとシフトさせる。短期的な必要性を満たしつつ、長期の展望も持つ。

美しいデザイン、高い品質に誇りと自信

工房は現在、水産加工場から、隣接するプレハブの建物に移っている。道路に面した場所には、直営店舗「AURA」(アウラ)がある。ウェブサイトでのネット通販も行う。

商品は、キーホルダー、携帯ストラップ、コースター、マグネットといった木工品を中心に、ペアグラスなどのガラス工芸品、レザーブレスレットなどの革製品、さらにはチーズケーキやクッキーといた菓子類まで広がりつつある。価格帯は840円から5,040円まで(2014年1月現在)。

職人は女性6人、男性1人。これに販売担当の女性1人と湯浅さんを含めて総勢9人が工房と店を支える。

職人たちの年齢構成は20歳代から70歳までさまざま。ここに入るまで木工を経験した人はいない。立ち上げの際はプロの家具職人の指導を仰ぎ、その後は自分たちで試行錯誤しながら技を磨いた。今では新製品の開発も、デザインから仕上げまで自分たちで行う。

木工品の場合、作業工程は大きく分けて「削り」「やすりがけ」「仕上げ」の3段階。型枠などは使わずフリーハンドで加工する。そのため木目の現れ方はもちろん、優雅な曲面の表現も、同じように見えて一点一点微妙に違う。素材の状態に合わせて最も美しく仕上がるようにつくられている。素材はカエデ、サクラ、クルミなど。完成品の木肌は実になめらか。水に濡れても、けば立つことはない。丁寧な仕上げが行われている証拠だ。

やすりがけ担当の人たちに、いっとき作業の手を休めてもらい、話を聞いた。

「ここにはいろんな年代の人が集まってる。みんな和気あいあいとやってる」「手をかければかけるほどきれいに仕上がっていく。やりがいがあるよ」「キーホルダーをバッグとかにぶら下げている人をたまに見かけるね。どんな気持ちかって?　そりゃうれしいよ!」

真剣な面持ちがふと緩み、笑顔がはじける。

キーホルダーをはじめとした商品群の優れたデザインと、加工技術の高さ。働く人たちのいきいきとした様子が印象的だ。

このプロジェクトは緊急雇用的な被災者支援の域を突き抜けているように感じられる。起業家精神あふれる新事業の萌芽と言うべきだろう。実際、初期のテスト販売を除けば、被災者・被災地を前面に出した販売戦略は採っていない。

▲株式会社onagawa factory「小さな復興プロジェクト」の代表を務める湯浅輝樹さん

高品質の商品でまちの魅力高める

「いろんな売り方を試しました」と、湯浅さんはプロジェクト開始当時を振り返る。

「これらを『被災地の人がつくったものです』と言って、それで買う人もいれば、嫌がる人もいました。一方、単なる工芸品として『かわいいね』と買ってくれる人もいました。それなら、わざわざ被災地の重いイメージを定着させるより、明るい商品展開の方がいいんじゃないかと。特に震災直後は暗いニュースばかりでした。あえて明るい方向でやっていく必要もあったと思います」

自分たちの生み出した商品の品質と、事業としての発展性を信じているからこそ、明るさをアピールすることができるのだろう。

「ただ『売れればいい』ではなく、買って満足してもらえる商品をつくる、真意はそういうことです。商品が増えていくなかでも、クオリティに関しては妥協しません」

その先に見据えるのは、「onagawa」ブランドの構築だ。従来の「魚のまち」とは一線を画す地域ブランドの確立こそ、湯浅さんのねらいであり、このプロジェクトの長期的な目標にして、最も重要な意義でもある。

「今後長期的に動いていくなかで、私たちとまちの人たちとの間で多少、考え方のずれが出てくるかもしれませんが、新しいブランドの確立を目指すというのは、ひとつの方向性として『あり』だと思っています」

木工品だけでなく、革製品や食品の開発も進めている。今後は高級食材の提供や、それを使った洋菓子などの開発に注力したい考え。

「女川には、ハーブなど食材となる山野草が数多く自生しています。カモミールとか。そういったものを使って質の高い洋菓子、加工食品を開発したい。『女川には実はカモミールがあって、こんなハイクオリティな菓子があるんだ、魚だけじゃないんだ』と。そうしたことを積み重ねていけば、興味を持って訪れる人も増えていくんじゃないでしょうか」

▲工房でやすりがけ工程を担当する女性。ひとつひとつ手作業で制作されている

未来につながる取り組みを今

女川は震災前から人口減少が続き、商店街ではシャッターを閉ざす店舗が目立っていた。国勢調査によると、2010年の人口は1万0051人。20年前の1990年と比較すると約4,000人減。震災後は、2014年2月末時点で7,410人まで減少している。

防災集団移転や市街地の区画整理、再開発などの復興事業が終わったとき、そこにできた新しいまちには、果たしてどれだけのにぎわいがあるのか。商工業は成り立つのか。ブランド構築の活力は残っているのか。

湯浅さんは「とにかく人が集まらないことには経済は成り立ちません」と言い切る。

「さまざまな分野で女川に注目を浴びさせ続けることが必要です。もちろん私一人ではどうにもなりません。多くの人の協力が欠かせません。私がやっているのは、単なるきっかけづくりに過ぎないかもしれませんが、それが10年、20年、50年後に誇れるまちにつながっていくとしたらどうでしょう」

落ち着きのある声に、熱い思いがこもる。

「私が関わったのがたまたま女川でしたが、これからの地域経済を考えると、地域再生のモデルとしてひとつの事例を挙げるのは重要。そこに携われるとしたら最高ですね」

今はまだ「小さな復興プロジェクト」だが、将来に向かって発展し続け、また、多くの人がその取り組みに触発され、いつの日か大きく実りを結ぶことを期待したい。

▲房に隣接する直営店「AURA」(アウラ)の店内

いがす実践11

5歳児親子の音色 太鼓をとおした地域での子育て

東船岡地区子ども会育成会文化部「三名生親子太鼓」

【宮城県柴田町】

▲親子太鼓のメンバーが集合！

活動時間になると、宮城県柴田町にある船岡生涯学習センターのホールに、5歳になる子どもたち7人が次々と集まってきて、あっという間に、元気な声が響き渡る。さっそく走り回る子、バチを手に太鼓で遊ぶ子など、目まぐるしく遊びが展開して威勢がいい。模造紙でつくられた出欠表に好きなシールを貼ったら、代表の相原美香さんの一声で集合！　地元の親子が月2回集まり、相原さんのアドバイスのもと、親子で太鼓の練習を1時間ほど楽しむ。中太鼓5台と、締太鼓2台。ずしりと体に響く太鼓の音は、子どもにとっても、お母さんにとっても魅力的。「腕を伸ばして！」という相原さんの声で、子どもたちの構える姿勢もピリッと。練習を見学している私まで、すっと背筋が伸びる。5歳児でも曲の流れがわかりやすいように、子どもたちの前に立って、叩く回数を指で示す大人のサポーターが2人付き添い、リズムを導く。一生懸命な子どもたち以上に、お母さんたちも太鼓を楽しんでいる様子が伝わってくる。子どもたちの集中力をとぎれさせないために、相原さんも工夫して声をかけるが、休憩時間になれば即、鬼ごっこ。さっきまでの真剣なバチさばきはどこへやら。「三名生親子太鼓（さんみょう）」の練習風景だ。

親子で取り組む楽しさ

三名生親子太鼓は、相原さんが長年役員を務める「東船岡地区子ども会育成会文化部」の活動の一つとして、2013年6月に発足。三名生児童館を中心に、メンバー募集のチラシをまき、太鼓体験会などを開いて、現在の子ども7人・大人5人・サポーター2人の体制がつくられた。5歳児を対象としたのは、「翌年、小学校1年生になる親子に、子ども会の活動にいち早く馴染んでもらえる機会をつくりたい」という相原さんの思いがあったから。なによりも、毎年地元の「東船岡ふるさとまつり」で5歳児によるかわいい演技を披露するための活動拠点となっていた三名生児童館が、その取り組みを終えることになり、お祭りから子どもの姿が消えてしまうことを危惧した。だから目標は、東船岡地区の早春を彩る2月の「ふるさとまつり」で太鼓演奏を披露することとした。

太鼓を選んだのは、地元にとっても、相原さんにとっても馴染み深いものだから。実は、東船岡地区子ども会育成会文化部では、小学生による「あぶくま太鼓」の活動を20年ほど続けており、プロの指導者のもと、地域のさまざまな場で演奏をお披露目してきた。3人の子どもを育ててきた相原さんも、あぶくま太鼓の活動をとおして太鼓の魅力にはまった一人。「初めての人でも、太鼓に直接ふれて叩くとおもしろく思ってくれる人が多い」と相原さんは話す。太鼓は、あぶくま太鼓から借りて、毎回相原さんが三名親子太鼓の練習へ運んでいる。手間はかかるが、月2回の練習と自宅での自主練習で上達していく子どもたちの姿を見るのはうれしい。楽曲は、あぶくま太鼓の創生期に用いた5歳児でもできるものを使用。親子で同じものに取り組む楽しさは、家庭での会話を豊かにし、仲間も増えて子育てを一層楽しいものとする。自分もたどってきた道だ。

▲活動拠点の一つ、船岡生涯学習センター

震災時の子どもたち

相原さんは、民生児童委員としての顔をあわせもつ。東日本大震災では、内陸の柴田町は大きな被害こそなかったものの、ライフラインが寸断され、給水や買い物に苦労した。それは高齢者や障害のある人だけでなく、幼い子どもを抱える世帯も同様だった。地元の炊き出しを手伝い、気になるお宅を訪ねておにぎりなどを配り、外出できない本人に代わって給水ポイントまで行き、30〜40リットルの水を運んだ。

また、子ども会育成会文化部長として、「あぶくま太鼓」を中心とする子どもたちの安否確認をしたいと思い、家族に相談。当時、活動拠点としていたセンターは避難所となっていたため、太鼓を借りて自宅に運び、「(2011年) 3月26日に自主練習会を開くから、来られる人は相原の家に集まって」とメンバーに声をかけた。すると、思いがけず40人が自宅に集まったという。子どもたちとの会話からは、学校がなくてつまらないし、遊んでいいと言われても何をしていいかわからないし、大人から家の片づけなどの小間使いをさせられてたいへんな様子が伺えた。相原さん自身、小学3年生のときに宮城県沖地震を体験しており、大人の小間使いをするたいへんさは身に染みている。「そうだよね、水汲み手伝うのって疲れるよね」という相原さんの相槌ちに、子どもたちはほっとした表情を見せたという。つかの間ではあるが、久々に仲間と顔を合せて太鼓に興じる時間は、子どもたちに安心感と笑顔をもたらした。自宅で太鼓をたたくことに、近隣から苦情が寄せられるのではないかとハラハラしていた相原さんだが、実際には一件もなく、自宅での自主練習会は4月上旬にも開かれ、太鼓を通じて仲間の輪が深まった。

▲練習の合間は、絶好の遊び時間！

地域での子育て

三名生親子太鼓の発足から8か月経った2014年2月23日、目標としてきた「第18回東船岡ふるさとまつり」が船岡生涯学習センターで開かれ、さまざまな世代の人が日ごろの練習成果として芸能を発表した。三名生親子太鼓も、法被姿の子どもと浴衣姿の大人で、和太鼓演奏を披露した。狭い紅白幕の下でお互いに着付けをし合い、緊張の面持ちのお母さんたちとは対照的に、元気はつらつな子どもたち。集まった人たちは、自分の孫のように目を細めて演奏に聞き入り、会場からは「かわいらしいね」という声が聞かれた。

実は、三名生親子太鼓は5歳児限定で、1年限りでメンバーを入れ替える。第1期生となる今年度のメンバーは、ふるさとまつりでの演奏を成功させ、この3月5日に卒業した。次なる活動先として「あぶくま太鼓」が控えている。

現在2期生を募集中で、体験会も開いているが、反応は芳しくない。三名生児童館の幼児保育の閉鎖にともない、町は新たに「子ども支援センター」を開設するが、今年度は拠点がなくなる。長年、地域の子育てに携わってきた相原さんは、「今年が踏ん張りどころ」と腹をくくる。太鼓を通じ、親子で学ぶことで家庭に笑顔を、練習の成果を発表することで地域に笑顔を。地域で子育てを支える親子太鼓の取り組みは、始まったばかりだ。

▲みんなで息をあわせて打ち込む

いがす実践12

福島に100年続く文化を！新たな未来を築く男性たち

特定非営利活動法人ふくしま新文化創造委員会

【福島県福島市】

▲大勢の観客が集まった旗揚げ公演

福島県に100年続く文化を築こうと、福島県福島市を拠点に活動している男性たちがいる。NPO法人ふくしま新文化創造委員会が主催・運営する男性だけのエンターテイメント集団「ロメオパラディッソ」だ。ロメオは「ローカル（地方の）・メンズ（男たち）・オーガニゼーション（組織）」の頭文字からとった造語。パラディッソはイタリア語などのラテン系の言葉で「楽園」、英語でパラダイスを意味している。「福島を元気にするために集う男たちの集団」という想いを込めて名づけられた。なぜ男性たちは福島に新たな文化を築こうとしたのか。始まりは2013年2月。東日本大震災後、福島県内で活動を続けてきた5人の男性たちの「福島を元気にしたい」という想いがきっかけとなった。

次の世代になにを残す？

「震災から1年、2年と経過して、復旧だけが復興なのかと疑問に感じていたんです。道路の整備や除染作業が日々進められ、まちの形が整っても、そこに暮らす人がいなければ、地域に愛着をもてなければ、それは復興とは呼べないのではないか、そう感じていました」そう話すのは、NPO法人ふくしま新文化創造委員会代表理事の佐藤健太さん。

また、佐藤さんたちにはもう一つ気にかかっていたことがあった。それは、震災後、福島県についてしまった放射能や被災地といったマイナスのイメージだ。「自分たちが次の世代に残すのは、そうしたイメージだけでいいのだろうか。こんなときだからこそ、おもいっきり明るいものを未来に残したいと思いました」と、佐藤さん。福島に暮らす人が地域に愛着をもち、多くの人が足を運びたくなる、「福島と言ったらこれだ」と、地域の誇りとなるような新しい福島の姿を100年続く文化として築くことができれば。そうすれば福島がもっと元気になるはず！

想いを形にすべく、男性たちは任意団体「ふくしま新文化創造委員会」を設立（同年11月にNPO法人認定）。男性だけのエンターテイメント集団「ロメオパラディッソ」の立ち上げを決意した。

▲公演の一場面

「できる」と信じて

2013年4月、福島に新しい文化をつくりだすため、動き出した男性たち。11月に旗揚げ公演を行うこと、内容として、歌やダンスなどを交えた演劇を行うことが決定した。けれども課題はここから。劇の台本を書いた経験がある人もいない。劇を行うにも人数が足りない。旗揚げ公演まであと半年。監督を探すだけでなく、一緒に舞台をつくりあげるキャストの募集や広報活動など、それらすべてを一挙に行うことに。

台本を書いてもらおうと関東に出向き、多くの演出家や脚本家に声を掛けたが、「素人だけでは無理だ」「だれも見に来ないだろう」、そんな厳しい言葉も聞かれた。キャストの募集に関してはホームページに掲載するほか、チラシを作成し、イベントで配り歩いたり、市内の店舗に置いてもらったりと、呼び掛けを実施。さまざまな方法で募集活動を行ったものの、思うように集まらない時期もあった。本当に公演ができるのか、不安になることもあったという。それでも、男性たちの決意が揺らぐことはなかった。「周りから『できるわけないよ』っていう声もありましたし、正直不安もありました。でも自分たちが諦めてはだめと思ったんです。諦めなければできるっていうことを俺らが魅せてやろうって。本当に勢いだけで動いていましたね」。そう振り返る、キャストリーダーのSHIGEさん。立ち止まっている暇はない。やるしかない。

福島に「すごいもの」を残したい

キャストが揃ったのは8月。福島県在住者を中心に、福島に想いのある男性30人が集まった。舞台経験者は2人のみ。ほとんどが舞台初心者だ。監督は東北で活動している劇作家の大信ペリカンさんに。8月21日から始まった練習では、地元住民から無償提供を受けた稽古場「ロメオ蔵」にて、基礎からしっかりと積み重ねていった。

それぞれが仕事をもちながらの練習。舞台で使う大道具などもすべて手づくりのため、やらなくてはいけないことは山のようにある。キャストの数人は活動拠点である「ロメオ城」で共同生活を開始。市外に暮らすキャストは仕事が終えたあとに福島市へ向かい練習…という生活を連日続けた。「みんな舞台の経験がないので、どこまでやるのがいいのかがわからなかった。知り合いに観てもらったときも、『よくなったよ』って言われたのですが、『身内だからそう言ってるんじゃないか!?』って思えてしまって。わからないから余計に不安になっていました」「大道具は本当に時間がかかったんです。練習が終わって、さあこれから帰ろうというときに、『帰る前にこの作業だけやっていってくれ！』って言ったり。本当にハードだったよね」と、佐藤さんとSHIGEさんは当時を思い起こす。10月は週4～5日、11月は毎日練習という厳しいスケジュール。けれども、誰一人として投げ出すことはなかった。想いをカタチにしたい、福島にすごいものを残したい。『なにか』が男性たちを突き動かしていた。

希望や憧れを

そうして迎えた2013年11月16日。福島市に建つ福島市公会堂で、ロメオパラディッソの旗揚げ公演の幕が上がった。大道具が完成したのは会場3分前。「『あと3分で人を入れるよ！』って言われながら、急いでステージの掃除をしていた」と、懐かしそうに話す佐藤さんとSHIGEさん。

昼夜2回に分けて行われた公演には、1,450人もの観客が来場。約2時間の間、歌やダンス、太鼓演奏などを織り混ぜた音楽劇がステージの上で繰り広げられた。劇の内容を震災劇ではなく、音楽劇にしたことにも理由がある。「重く苦しいものばっかりじゃ希望も憧れももてない。それに、福島イコール被災地じゃないんだよっていう見方をこちらから出していかないと、いつまでも被災地のままなので。なにより、お客様に単純に楽しんでもらえるものにしたいと思っていました」と、佐藤さん。男性たちの発する言葉、表情、動き、その一つひとつの力強さに、終演後、客席から立ち上がり拍手する観客も。ステージの上に立つ男性たちの姿はたくましく、とても大きく感じられた。

観客からは「来てよかった」「やる気が出た」「元気をもらった」という言葉が掛けられ、なかには子どもが真似をしているといった声も。「いつか、『ロメオみたいになりたい』って子どもたちが話すような存在になれたら」そう、SHIGEさんは微笑む。

NPO法人ふくしま新文化創造委員会では、今後、震災記念館を併設した常設シアターの創設を予定。2014年5月には、第2回公演を開催することが決定している。「地方の男たちの組織なので、舞台だけにこだわらなくてもいいと思うんです。中学校の体育でダンスが必修になったので、なにかの機会に『ロメオに教えてもらおうか』という話が出たり…というようになるといいなと感じます。少しずつ地域に根づいていきたい」と、SHIGEさんは話す。

復興への一歩

一歩を踏み出さなければなにも始まらない。けれども、一歩を踏み出したら変わる未来はある。そう思わせるのに十分すぎるほど、ロメオパラディッソの舞台には胸を熱くし、心奮い立たせられるものがあった。「本当にできるのだろうか」「人が集まるのだろうか」、そんなたくさんの不安が押し寄せるなか、もがきながらも、踏んばって、真っ直ぐに突き進んできた男性たち。ステージでの姿ももちろんだが、福島を元気にしたい、福島を元気にするために、自分たちが新しい文化を築き上げるのだという信念を揺らがすことなく、手を伸ばし、新しい文化の始まりをつかんだ男性たちのその姿、その心意気は、本当にかっこいい。

佐藤さんはこう話す。「大人も子どもも憧れる男たちの背中を魅せながら、後世に続く文化を、夢や希望を福島に残していきたい。なにかが崩れたときだからこそ“なにかを興したい”と感じる。きっとこの気持ちが復興の第一歩だと思うんです」。

先を引っ張ってくれた彼らの姿は、新しい道を切り開く勇気を、だれにでも今を変えられる可能性があるのだということを教えてくれた。

▲連日行われた練習

▲公演のラストを飾った圧巻のパフォーマンス

いがす実践13

受け継がれる太鼓の音色 まちを元気にする太鼓演奏

小浜風童太鼓（こばまふうどう）

【福島県富岡町、いわき市】

▲小浜風童太鼓の皆さん

福島県富岡町で結成された太鼓グループ「小浜風童（こばまふうどう）太鼓」。地元の祭りでは、力強い音色を鳴り響かせ、住民たちを盛り上げ続けていた。

小浜風童太鼓の前身となっているが、1991年に発足された「小浜鼓友会」だ。立ち上げたのは小浜風童太鼓代表の榎内正和さん。榎内さんが青年会入会まもなく、それまで途切れていた盆踊りを復活しようと青年会員で盛り上がったが、太鼓を叩ける会員がいなかったため、ドラムの経験がある榎内さんを中心に、何人かで太鼓を練習し、盆踊り大会を復活させた。

その経験から、今後まちを担っていくであろう地区の子どもたちと一緒に太鼓を叩き、それが、次の世代の子どもたちにも受け継いでいくようなものになるとまちもどんどん活気づいていくのではないか、そう考えた榎内さんをはじめとした青年会・地域住民たちは、さっそく地区の小学生に声掛け。21人の子どもたちが集まった。

子どもたちの夢と憧れ

そうして始まった太鼓の練習。しかし、もともとあった太鼓の数も多くはなかったため、全員が太鼓を叩くということは難しかった。「太鼓の数と子どもたちの人数が合わなくてね。太鼓だけだと足りないから、低学年の子は竹を太鼓代わりに叩いたり、一つの太鼓の後ろに一列に並んで順番で叩いたり…というようにしていました」と、榎内さん。けれどもそれは決して悪いことではなく、大きな太鼓を一人で叩く高学年生の姿は、低学年の子どもたちにとって憧れであり、早く太鼓を叩けるようになりたいと、一生懸命練習に励んでいたのだという。「いつか太鼓を叩くんだっていう夢に向かって、みんな目をキラキラさせて夢中になって練習していました。私の息子もその頃から太鼓を叩いていたのですが、子どもの頃に身近に目標となる人や夢があったのはよかったんじゃないかなと思います」と、榎内さんは話す。

▲寄贈を受けた和太鼓

太鼓演奏でみんなを笑顔に

町内の夏祭りで開催される盆踊りでは、毎年奏者として参加。「生」の太鼓の音のもつ迫力や子どもたちのはつらつとした姿は大きな感動を呼び、住民からの応援も増えていった。「小浜鼓友会が盆踊りを守っているよね」という声も聞かれていたという。この音色がずっと続くようにと、地区からの寄付を受け、太鼓は13台まで増えた。

発足時に小学生を対象としていた小浜鼓友会だが、中学校入学となる子どもたちから、まだ叩きたいという声が榎内さんのもとへ多く寄せられた。そこで、2001年には中学生を対象とした太鼓ユニット「小浜風童太鼓」を結成。小学校を卒業してからも、演奏を続けられる機会ができたことに継続を望んでいた子どもたちは大喜びだった。

大好きな太鼓演奏がこれからも続けられる。それぞれ学生生活を楽しみながらも練習を重ね、夏祭りでの盆太鼓だけではなく、曲を創作したりと、小浜風童太鼓のメンバーたちは徐々に演奏の幅を広げていった。また、地区内外で太鼓の演奏を披露するだけにとどまらず、地元の介護施設や老人会に出向き、演奏や太鼓の体験会を開催。「『ありがとう』と手をぎゅっと握ってくださる人たちもたくさんいて。自分たちのほうがお礼をしなくちゃと思うくらいうれしかった」と、メンバーは当時を振り返る。小浜風童太鼓の演奏は、地域に暮らす多くの人たちに笑顔を与えていたのだ。

突然の活動休止

そうしたなか、誰もが予期せぬ出来事が。2011年3月に発災した東日本大震災。地区の公民館に保管していた太鼓13台すべてが津波によって流失してしまった。「もしかしたらどこかに太鼓が残っているのではないか、そう思って探してみたのですが、1台もありませんでした。津波の被害を受けて変わってしまったまちの様子を見ても、“太鼓は全部流されたんだ”ということが、まったくぴんとこなかった」と、榎内さんは当時を思い起こす。福島第一原発事故の影響も重なり、小浜風童太鼓のメンバーたちは皆故郷を離れることに。小浜風童太鼓は、やむなく活動を休止することとなった。

「メンバーの４人は福島県いわき市に引っ越すことが決まりました。心のなかでは小浜風童太鼓を復活させたいという気持ちがあるものの、太鼓もないですし、再開することは難しいだろうと思っていました」。太鼓がないということだけではない。新たな生活へ対応していくこと、これからのことなど、一気に押し寄せた多くの葛藤のなかで、目の前にあるものに応えていくことだけで精いっぱいだった。気持ちだけではどうにもできなかった。

求められる音色

そんなとき、メンバーの背中を押したのは、住民からの太鼓演奏を待ち望む声だった。懐かしい故郷の音色をもう一度聞きたい。これまで地域住民たちにたくさんの笑顔と元気を与えてきた太鼓の音。その音色を多くの住民たちが求めていた。「私たちの演奏でみんなを元気にしたいと感じました」。メンバーたちの強い想いが通じたのか、2011年の夏、いわき市内の太鼓チームから太鼓と練習場を借りることができ、練習を再開。秋には日本太鼓協会会長から、2013年春には助成事業による和太鼓の寄贈を受け、本格的な活動再開を果たした。メンバーも、榎内さんをはじめとし、富岡町にいた頃から活動をともにしてきた榎内隆大（たかひろ）さん、稲元暁大（あきひろ）さん、猪狩考平さんの４人のほか、新たに大熊淳子さんと大熊翔太さんをメンバーに迎え、６人に。小浜風童太鼓の復活だ。

▲迫力ある音色が鳴り響く

▲房想いを太鼓に込める

同年８月、福島県三春町に建つ富岡町熊耳（くまがみ）仮設住宅で開催された盆祭りで、小浜風童太鼓は震災後初となる演奏を披露した。富岡町の出身者が暮らす同仮設住宅。演奏後、盆踊りに参加した住民からは、「久しぶりの盆太鼓で元気が出た」「演奏良かったよ」といった、喜びや励ましの声が寄せられた。同仮設住宅自治会長であり、震災前は富岡町小浜行政区長として小浜風童太鼓を応援し続けてきた松本政喜さんも、「彼らの想いが伝わる演奏でした。たくさんの力をもらった！」と、声を弾ませる。

明日への力に

小浜風童太鼓は、今後、仮設住宅のみならず、介護施設や借り上げ賃貸住宅（みなし仮設住宅）でも、太鼓演奏や体験教室を開催したいと考えている。「震災の影響により不便な生活を送っている人はまだまだたくさんいます。気持ちを抑え、心を閉ざしてしまっている人もいらっしゃるかと思います。私たちの演奏を聴いていただくこと、また、一緒に太鼓を叩くことで、少しでもそうした気持ちが和らぎ、笑顔になっていただければと思います」と、榎内さん。

いまだ多くの住民が避難生活を余儀なくされるなか、小浜風童太鼓の演奏は、明日への力となる、多くの感動と活力を住民たちに与えている。

いがす実践14

平均年齢80歳！ 住民たちが輝くまちの劇団

劇団ババーズ
【福井県福井市】

▲劇中には全員が躍る場面も。手をあげたり、足をあげたりと、かなりの運動量

福井駅からJR越美北線で30分ほど、約20㎞の行程を列車に揺られて到着したのが、美山駅。2006年に福井市に合併した、旧足羽郡美山町の中心部になる。人口約4,500人、高齢化率37％、後期高齢化率23％（2013年8月9日現在）のこのまちの集落に、住民たちが輝く劇団があると聞き、伺った。

美山は文字どおり、周囲を山に囲まれた地域だ。劇団があるのは、上宇坂地区の蔵作（くらつくり）集落。美山駅から車でさらに15分ほど入った、45世帯が暮らす集落だ。

劇団の名称は「ババーズ」。蔵作に住む高齢女性が中心となった劇団だ。2002年に創設され、現在、平均年齢80歳。16人の団員のうち、14人が女性。創設から10年以上が経ち、公演回数も200回を超えている。公演先は、福井市内にとどまらず、要望があれば福井県外までも出向く。

劇団ババーズの誕生

劇団の創設者で座長をつとめる林幸男さんは、蔵作生まれ。教員を定年退職したのち、3～4年ほど、ふれあいサロンで健康体操の指導、民話や絵本の読み聞かせ、ナツメロ講座などの講師として地域で活動をしていた。しかし、林さんは、サロンに集うお年寄りたちがいつも受け身でいることが気にかかっていた。「こういった講座をやりましょう」といえば集うが、自らが発信して何かをしよう、という声があがっていなかったからだ。

戦後、青年演劇とよばれる演芸会がお寺などで開催されていたのを思い出した林さん。そのころの楽しかった記憶から、演劇をこの集落でできないか、と考えた。住民も、集落センターで講座をこなすのではなく、自分たちで楽しみ、それを披露できる場があれば、もっといきいきと暮らすことができるのではないか。そう考え、さっそく脚本を書いてみることにしたという。

▲代表の林幸男さん

泥くささが大ウケ

脚本は、集落の人になじみの深い地元・蔵作の民話をアレンジした、林さんによるオリジナル喜劇だ。当初は「セリフが覚えられない」「人前で演じるのは恥ずかしい」と言っていた住民だが、しだいに「練習に通うのが楽しい」という声に変わっていったという。

2002年2月24日、劇団ババーズのこけら落とし公演が行われた。週1～2回の練習を3か月ほど重ねて臨んだお披露目公演は、蔵作のお寺で実施した。地元の人たちの目の前で演じ、その観客が目の前で笑ったり拍手をする姿に、団員は大きな達成感を感じたそうだ。公演回数が200回を超えた現在でも、新しい劇が完成したときの初演は必ず地元で行っている。

ババーズの活動は口コミで少しずつ知れ渡り、集会所、温泉施設、高齢者施設、市民会館など、要請のままに披露する場を広げてきた。ステージに上がり、ライトを浴び、拍手をもらう。このことが団員のより大きな原動力になる。アドリブが飛び出したり、ときにはセリフを忘れてしまうのもご愛嬌。その姿がまた、観客の笑いを誘う。林さんは「下手が売りの劇団ババーズ。その泥くささが受けている」という。

遠方への公演は、旅行気分で出かけている。公演だけでなく、行き先でおいしいものを食べるなど、楽しいことを忘れない。ある団員は「ババーズがなければ、こんなにいろいろなところに出かけることもなかった」という。

看板女優は90歳！

ババーズの練習会場は、蔵作の農事集会所。畳敷きの大広間で行う。お茶を飲んだり、おしゃべりをしたりして時間を過ごしてから練習にかかる。「次回の公演の演目は、もう何度も演じている劇なので、練習は週1回程度」と林さん。練習の前には、集会所で車座になり「甘いものをちょっと食べながら」のおしゃべりの時間。団員からは、「これも楽しみのひとつ」と笑いがこぼれる。

「さて、そろそろ始めましょう」という林さんの声で、練習開始。伺った日の練習は『袋の中身』。蔵作という地名の由来にまつわる民話を林さんが喜劇に書き上げたものだ。

実は、集会所までの道中、林さんから「看板女優は90歳」と伺っていた。セリフを発すると、まずその声の張り、声の大きさに驚いた。その声で、場内の雰囲気が一変するほどの迫力がある。林さんによると、この女性・松浦政子さんは以前、うつ病を患っていたが、ババーズでの公演をとおして元気になり、観客を楽しませる術をいつの間にか心得ているそうだ。芝居が終わると、またもとのおばあちゃんの笑顔。「なかなかセリフも覚えられないけれど、楽しくて、楽しくて」と満面の笑顔を見せてくれた。

▲看板女優の松浦政子さん。笑顔が魅力の90歳

元気はつらつ医者いらず

ババーズの団員は、その多くが結婚して蔵作に嫁いできた住民たちだ。ふだんは休耕田を活用した畑の手伝いや、お寺の掃除やお茶出しなどの手伝い、そして家事をする主婦でもある。また、平日は孫のお世話をしている人もいるため、公演は土日に限られている。

「2004年の福井豪雨では、集落が壊滅的な被害を受けた」と林さん。犠牲者は出なかったものの、家を失った人もいた。その被害から立ち上がり、ババーズの活動を続けたことは、集落自身が元気を取り戻し、そしてその元気を届けることでもある。この豪雨をきっかけに、福井市中心部に移り住んだ団員もいるが、今でも練習や本番には顔を出し、劇団を続けているという。

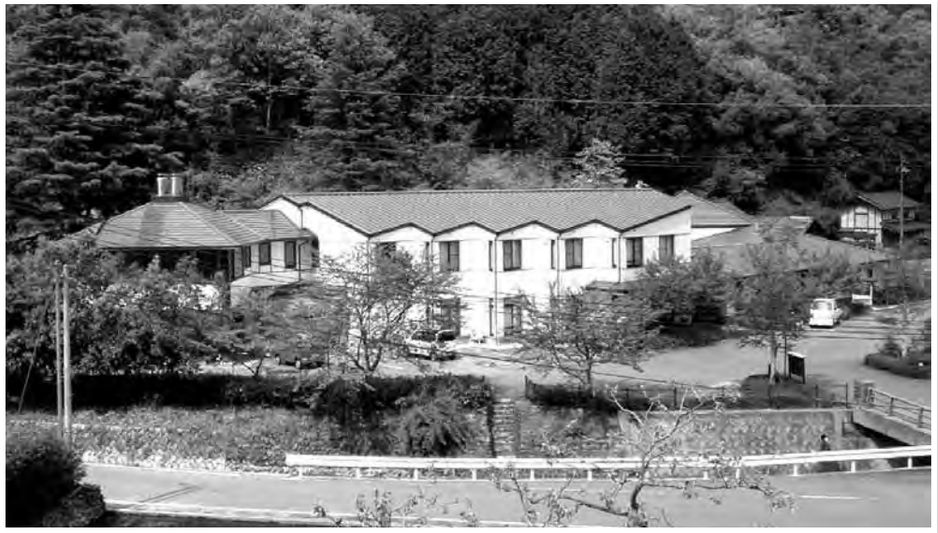
林さんは、今後の課題を「後継者不足」という。劇団の創設から12年がたち、3人が亡くなった。

「劇団ババーズ、元気はつらつ医者いらず」とは、ババーズの活動を知った医者の言葉だという。おしきせではない、住民自らが思い、形にしてきた劇団には、元気があふれている。その元気の源は、「ババーズが生きがい」と劇団員が口をそろえる、その「生きがい」に違いない。

地域の全戸が加入 住民が運営する、地域まるごと博物館！

川根振興協議会

【広島県安芸高田市】



▲交流拠点「エコミュージアム川根」

平成の大合併により、2004年、旧高田郡6町が合併して広島県の中北部に誕生した安芸高田市。川根振興協議会は、旧高宮町の北端に位置し、島根県と隣接した地域だ。市内中心部までは車で30～40分かかる。

現在の川根地区の人口は549人（238世帯）、高齢化率は45.72％で、安芸高田市の高齢化率35.2％を大きく上回る（2010年3月時点）。1940年代には410世帯2,198人が川根地区に暮らしていたということからも、人口減少の拍車が伺える。

その川根地区を大雨による大洪水が襲ったのは1972年7月。地域が孤立し、文字どおり「陸の孤島」となった川根地区は、いっそうの過疎が進むことになった。このままでは地域が地図から消えてしまうのではないか、そう考えた住民は同年2月に結成された地域の全戸が加入する「川根振興協議会」のもと、行政に頼るばかりではなく、「自分らでできることは自分らの手で」を合言葉に、災害復興と地域づくりに着手することになった。

廃校を活用した交流拠点施設

「山間の集落で、農地はわずか100ヘクタール。農業や林業で生計を立てているが、他市に働きに出る人も多い。集落には、ものの豊かさはないけれど、隣近所も家族のような人間の温かみがあった」と話すのは、川根振興協議会会長の辻駒健二さんだ。

1992年、廃校となった中学校跡地を活用した交流拠点施設「エコミュージアム川根」が完成した。地域全体でまちをつくることをコンセプトに、地域にあるものを住民が誇りをもって活用しよう、そして住民自らが運営に携わる「経営の意識」をもつことが目的だ。「やがて老いを迎えるなかで、自分たちが安心して集えるところを自分たちの手でつくりあげる。そのためには予算を組んで利益を生み出し、地域で経営していく才覚が必要だ」と辻駒さんは語る。エコミュージアムには、地元の手づくりの料理が食べられるレストラン、宿泊研修施設の機能も兼ね備えているが、住民の交流拠点としての活動が主になっている。

▲川根振興協議会会長の辻駒健二さん

月3回の自主運営によるサロンは1回500円。住民が集まり、食事を一緒にとって帰る。ほかにも、小学生の放課後クラブなどの場ともなっている。

住民運営による商店「万屋」と「油屋」

2000年には、地域に唯一となった商店とガソリンスタンドを出店していたJAが地域から撤退をした。集落での買い物ができなくなると、高齢者にとっては住みづらい地域になってしまう。そこで住民からカンパを募り、住民運営による商店「万屋」とガソリンスタンド「油屋」の運営が始まることとなった。当初、「赤字が出たらだれが出資を保障してくれるのか」と言う人もいたが、「みんなで使えば絶対になくならない」と辻駒さんが説得した。豆腐1丁から配達してくれる身近な店は、安心した暮らしに直結する。

ガソリンスタンドの運営には、大きな壁があった。安全面から、タンクのコーティングなどに莫大な補修費用が必要だった。住民のカンパでは到底まかなうことのできない金額に頭を抱えたが、地域のお年寄りに相談をすると「数年に1回、大雨で冠水する場所」だとわかった。そこで、河川改修や道路計画と抱き合わせ、地域の防災センターの計画を立て、ガソリンスタンドの維持補修費用と合せて補助金を獲得、地域の拠点としての機能をもたせつつ、ガソリンスタンドの運営が可能となった。

▲万屋(左)と油屋。近所の人がカートを押しながらのんびりと買い物に訪れる

生きる免疫力が高まる地域

地域の住民がデイサービスに通うためには、車で30分ほどの道のりがある。「私は車酔いするから行けなくて…」と民生委員に相談した女性の話を聞き、「地域にデイサービスがないことが問題」と改修型のデイサービスをつくった。週1回の開催だが、このデイサービスに市内の特別養護老人ホームの職員が出張するサテライト型をとり、住民のつどいの場としての機能も維持している。

若者の定住対策には、町営住宅の払い下げを行政にかけあった。居住条件は「義務教育の子どもがいる家庭・地域活動に参加する・20年居住する」という3点。その結果、人口が90人増え、現在、小学校に通う児童29人のうちの3分の2がここの住宅から通っている。しかし、3年後には統廃合により、市内の小学校、中学校ともに大幅に数が減る予定となっている。地域に仕事がないことも、大きな課題だ。

「それでも…」と辻駒さんは語る。「自分も親も、地域の人たちのおかげで生活ができていた。自分がここでどう生きるかが、地域への恩返しだ。地域と一緒に生きるという意味を一人ひとりが考え、自分の力を活かすことのできる地域であれば、生きる免疫力が高まっていく」と。

住民主体の活動が注目されるが、行政と同じ方向、同じ目的をもって地域づくりを進めるうえで、政策や制度の勉強も怠っていない。「税金を払っているから行政がやって当たり前、ではない。自分たちの地域のことは自分たちで決める」という強い意識に裏打ちされた信念が心に響く。

▲市町村営有償運送の「かわねもやい便」も運行

▲住民出資・住民運営による万屋。食品や生活雑貨を販売

全国から寄せられた いがす実践・活動提案紹介 II

「第1回いがす大賞」では、全国で活動する93団体のみなさまから、102件（実践部門83件、活動提案部門19件）ものご応募をいただきました。

ここでは、惜しくも最終選考とならなかった87件すべての「実践」と「活動提案」をご紹介いたします。

ふれあい拠点賞

特定非営利活動法人
復興支援奥州ネット
（岩手県奥州市）

奥州市に避難した方々を支援すべく、ホープラザ奥州を開設。農作業や被災者が講師の料理教室などを開催しています！

地域をとことん楽しむで賞

チームおおつち
（岩手県大槌町）

大槌の魅力を発信すべく結成。蛍観察会やキャンプファイヤーを開催。フットワークの軽さとチャレンジ精神が自慢です！

手を取り合う仲間賞

虹と有志の仲間
（岩手県大槌町・釜石市）

沿岸部から避難してきた住民と発足。畑仕事を行い、毎月沿岸部へ野菜を届けたり、体操を行ったりと交流を深めています。

集いの場づくり賞

いこいの宿
（岩手県山田町）

仮設住宅に暮らす男性たちが、集まれる居場所をつくろうと建てた「いこいの宿」。誰でも集える風通しのよい居場所です。

未来へとつながる団結賞

小鎚中村仮設団地自治会
（岩手県大槌町）

「心身の健康維持」「孤独予防」を目標に、毎朝のラジオ体操や演奏会、防火訓練など、さまざまな活動を実施しています！

牧場で極上体験賞

非営利型一般社団法人
美馬森 Japan
（岩手県盛岡市）

被災地を馬の力で元気にしたいと、牧場体験を実施！その後、東松島市に牧場を移転し、森の遊園地づくりに励んでいます！

新しい結づくり賞

社会福祉法人
一関市社会福祉協議会
（岩手県一関市）

被災3県から避難している住民たちの交流会を出身地別に開催。心のケアや近隣とのコミュニティ形成を図っています。

場の力賞

宮古地域傾聴ボランティアグループ
支え愛
（岩手県宮古市）

仮設住民からの「男が静かにくつろげる場所がほしい」という要望を受け、男の相談室を開設。気軽に集える場となっています。

女性の絆づくり賞

手芸サークルなでしこ
（岩手県一関市）

岩手県・宮城県の沿岸で被災し、一関市に避難した女性33人で手芸グループを結成！みんなでワイワイ楽しく活動しています！

健康づくり推進賞

健康運動サークル
たかた☆ハッピー♪ウェーブ！
（岩手県陸前高田市、大船渡市、住田町）

地域のみんなが元気になれるよう、仮設住宅や病院などで、「玄米にぎにぎ体操」を実施！体操後はみんな輝いています！

皆でつなぐ地産地消賞

特定非営利活動法人
遠野まごころネット
（岩手県遠野市）

飯舘村オリジナル品種かぼちゃ「いいたて雪っ娘」の代理栽培を実施。いつか飯舘村に里帰りし、世界に輸出！が目標です。

明日への希望で賞

関が丘第二雇用促進自治会
（岩手県一関市）

住民は皆一緒をスローガンに、料理教室や手芸の定期開催、花壇づくり、お祭りなど、積極的な活動を続けています！

未来への伝承賞

釜石市民劇場
（岩手県釜石市）

市民がオリジナル脚本で公演！小学4年生から71歳までの約50人が、震災後の釜石を舞台とした現代劇に挑みます！

フィランソロピー賞

株式会社　わかさ生活
（全国・宮城県）

被災地への義援金やサプリメントの寄付のほか、社員による仮設住宅への訪問・交流・地域清掃活動などに取り組んでいます。

金華山を宝島に！賞

特定非営利活動法人
FIRST ASCENT JAPAN
（宮城県）

牡鹿半島の復興には観光拠点である金華山の復興が必要！ボルダリングをとおし、牡鹿半島の魅力を国内外に発信します！

寄り合いでいがす賞

あすと長町
共生型コミュニティ構築を考える会
（宮城県仙台市）

災害公営住宅に移転する際に、今の仮設住宅のコミュニティが維持できるよう、住民が集まり話し合いを重ねています！

虹の架け橋で賞

あしなが育英会　東北事務所
（宮城県）

震災孤児の心のケアを行っています。子どもたちが心の内に秘めている思いを言葉や体で表現できるようお手伝いしています。

ふるさとの心を届けま賞

TAKURO＆瑠璃かげろう
（宮城県）

ピアノとお話のコラボを、市民センターや学校などで披露！聞いた人が懐かしく思ってもらえることを目指しています。

ナイス防災で賞

荒巻泉ヶ丘町内会
（宮城県仙台市）

日ごろの防災訓練を活かし、震災時には炊き出しも実施。明るい町内会を目指し、文化面も取り入れた活動を行っています！

どんどん運動ダンダン健康賞

特定非営利活動法人
健康応援・わくわく元気ネット
（宮城県）

震災後、いち早く避難所に入り、被災者の健康指導や運動指導を精力的に実施。現在も仮設住宅などで活動を継続しています！

不屈の精神で賞

株式会社
A-Muse 恵むの杜
（宮城県・福島県）

宮城県と福島県の幼稚園や仮設住宅などで実施している「楽つみ木」。崩れても諦めない、何度でもやり直せるがテーマです。

寄り添い支援賞

一般社団法人
パーソナルサポートセンター
（宮城県仙台市）

震災直後より、仮設住宅とみなし仮設住宅住民への見守り活動を実施。就労希望者への訓練プログラムも行っています。

未来へはばたくで賞
公益社団法人
セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン①
（宮城県仙台市）
子どもが安心して遊べる場所をつくろうと、子どもたちにアンケートを実施！その結果をもとに５か所の公園を整備しました。

ハッピースマイル親魂賞
子育てサークル　ハッピーママ
（宮城県仙台市）
復興応援フリーペーパー「オヤタマ（親の魂）」を発行。写真展やコンサート、ワークショップなどの復興支援を続けています。

地域の輪づくり賞
サロンぽっかぽか
（宮城県仙台市）
七郷地区の仮設住宅住民と地区住民との交流の場をつくろうと、サロンを開催！子どもたちも交えた交流を行っています！

希望のサークル賞
女性部　あらはま
（宮城県仙台市）
顔の見える関係を取り戻すため、荒浜移転まちづくり協議会の女性部として発足。手仕事やサロンを中心に活動しています！

支え合いリーダー賞
スマイル河原町
（宮城県仙台市）
支え合いの芽が生まれる場づくりを目指し、仲間５人でサロンを開催！仮設住宅や高齢者施設への出前サロンも行っています。

旅して復興助けま賞
東北震災復興ツーリズム協会
（宮城県仙台市）
岩手県・宮城県の沿岸で被災し、一関市に避難した女性 33 人で手芸グループを結成！みんなでワイワイ楽しく活動しています！

未来のナイチンゲールで賞
東北文化学園大学看護学科
健康支援隊
（宮城県仙台市）
看護学生が仮設住宅で看護支援を実施。心と体のケアとして、一人ひとりオーダーメイドの支援を心がけています。

希望の花を咲かせま賞
雄勝花物語実行委員会
（宮城県石巻市）
花を媒体に被災者の霊を弔い、雄勝に思いを寄せる人が集える場づくりを実施。復興の後押しになることを目指しています。

素敵な“和”で賞
特定非営利活動法人
石巻復興支援ネットワーク①
（宮城県石巻市）
イベントなどをとおし、コミュニティ形成事業を実施！災害公営住宅転居後の暮らしも見据えた支援を心がけています。

生きがい手仕事賞
特定非営利活動法人
石巻復興支援ネットワーク②
（宮城県石巻市）
石巻のお母さんたちによる、手づくりアクセサリーブランドを設立！仕事を始めてからどんどん元気に、お洒落になりました！

カフェで地域がつながるで賞
特定非営利活動法人
ベビースマイル石巻
（宮城県石巻市）
「お産と子育てのコミュニティカフェ」を各地で開催！ママたちが安心してくつろぎ、情報交換ができる場になっています！

子どもの未来づくりで賞
東日本大震災圏域創生 NPO センター
（宮城県石巻市）
放課後子どもクラブや子どもたちによる、まちづくりプロジェクトを実施。たくさんの子どもたちの笑顔があふれています。

笑顔咲く活動賞
和小倶楽部・ジン
（宮城県石巻市）
渡波地区万石町集会所でつるし雛づくりを行っています。友だちの輪が広がり、心身ともに元気になる、素敵な女性の会です。

笑いで復興賞
名取笑う会
（宮城県名取市）
仮設住宅でのラフターヨガを中心とした脳トレ手遊びや出前講座を開催。たくさんの人たちと笑い合い、復興を目指します。

未来を照らす方言賞
方言を語り残そう会
（宮城県名取市）
避難所での方言かるた大会から始まり、方言お茶飲み会を実施。たいせつな言葉、方言をとおして、みんなの笑顔が増えました！

地域連携賞
特定非営利活動法人
まなびのたねネットワーク
（宮城県仙台市）
石巻市内にある５つの高校・企業・行政・NPO の連携事業を展開！石巻市の課題を解決できる人材の育成を目指します！

いがす英語で笑いま賞
被災地支援つなぎた～い
（宮城県仙台市）
ワシントン州から被災地支援で来日した夫婦と仮設住宅で交流！英語と宮城弁を教え合い、爆笑の渦に包まれています！

地域貢献賞
ボランティアサークル
こだま会
（宮城県仙台市）
仮設住宅などで手品や腹話術、舞踊などを公演。「出逢い・思いやり・元気・楽しい・面白い」をテーマに芸を磨いています！

子どもも地域も育てま賞
ままふあ会
（宮城県仙台市）
子育てママ７人で結成。地元の取り組みを紹介する冊子や写真展など、子育てをしながら復興支援の提案・発信をしています！

つどって元気発信賞
若松会
（宮城県仙台市）
みなし仮設住宅に暮らす住民で結成。「元気でいこう若松会」をモットーに、サロンやキッズダンスなどを行っています！

地元への恩返し賞
石巻工業高校建築部
（宮城県石巻市）
蛤浜集落の復興のために、ベンチを制作・寄贈。ベンチ制作をきっかけに、屋台制作など、被災者支援に取り組んでいます！

輝くまちづくり賞
石巻に恋しちゃった♡実行委員会
（宮城県石巻市）
住民が好き・得意を持ち寄って、達人と称する住民による小規模プログラムを開催！皆が参加できるまちづくりが目標です！

新たなまちづくり賞
一般社団法人
ISHINOMAKI2.0
（宮城県石巻市）
まちを知り、楽しみ、語るまちづくりウィークを企画！地域内外の交流やまちの可能性を探るイベントを実施しています！

住みよい暮らしづくり賞
一般社団法人
BIG UP 石巻
（宮城県石巻市）
仮設住宅住民と在宅被災者の壁をなくし、再び人々が住みたいと思えるようなまちづくりを目指し、活動しています。

誰もが主役！の場づくり賞
一般社団法人
コミュニティスペースうみねこ
（宮城県女川町）
男性も女性も活躍できる、果樹園づくりに奮闘中！役割分担をしながら生活再建に向けた支援を行っています。

豊かな収穫で賞
新田・清水仮設住宅住民有志
＆東北福祉大学「まごのてくらぶ」
（宮城県女川町）
隣接する仮設住宅住民と学生が整地開墾し、農園づくり！皆が集い、農作物のみならず「豊かな収穫」が日々行われています。

舞いで地域活性賞
花釜音頭保存会
（宮城県山元町）
花釜音頭を復活させ、花釜区民のコミュニケーションを図る目的で結成。花釜音頭の歌と踊りで地域活性化を目指します！

地域の語り部賞
やまもと民話の会
（宮城県山元町）
震災後、災害 FM にて民話を語る一方、津波証言を刊行。津波体験や民話の語りは、多くの人が耳を傾けています。

助け合い拠点賞
特定非営利活動法人
亘理いちごっこ
（宮城県亘理町）
震災後、地元主婦が中心となり、コミュニティカフェレストランを開設！地域を越えて助け合える場づくりが目標です。

そばで地域振興賞
結いの手プロジェクト七ヶ宿
（宮城県七ヶ宿町）
仮設住宅で、そば枕づくりやお茶会などを実施。七ヶ宿町はそば栽培が盛んなため、町の PR も兼ねて販売も行っています！

地域の宝探し賞
一般社団法人
南三陸町復興推進ネットワーク
（宮城県南三陸町）
小学生を対象に自然体験学習講座を実施！子どもたちに遊びと学びの場を。そして、地域のつながりの再構築を目指します。

復興プロデューサー賞
特定非営利活動法人
ガーネットみやぎ
（宮城県村田町）
住民同士によるコミュニティづくりと経済的自立の両立に重きを置き、活動。地元有志が小さい復興をプロデュースします！

実践部門

笑いの以心伝心で賞
いやし隊（福島県福島市）
住まいがバラバラになった住民に笑顔を！飯舘村社協職員が奏でるスコップ三味線や銭太鼓で、村民を笑かしちゃいます！

チャレンジ！アンサンブル賞
デコボコアンサンブル（福島県福島市）
飯舘村の住民を勇気づけたいと、吹いたことのない楽器を手に取り、演奏にチャレンジ！多くの人たちに活気を与えます！

みんなで健康増進賞
浪江町サポートセンターふくしま①（福島県福島市）
健康でなければ遊びもできない！誰もが参加しやすい１８～２０時に、体操教室「らんランクラブ」を開催しています！

料理 でいがす交流賞
浪江町サポートセンターふくしま②（福島県福島市）
サポートセンターの広い台所で料理づくり！おしゃべりを楽しみながら大人数分の料理をつくることで、気持ちもゆったり。

地域の先生発掘賞
浪江町サポートセンターふくしま F クラブ（福島県福島市）
住民同士、得意な手芸やパッチワークをお互いに教え合い、制作活動をしています。みんなで集う時間はかけがえのない時間。

ほっこり集い場賞
浪江町サポートセンター杉内（福島県二本松市）
毎週火曜日に「杉内カラオケ道場」、第１第３土曜日にはカフェを開催！さまざまな年齢の住民たちが交流を楽しんでいます！

笑顔が生まれる食卓賞
浪江町サポートセンター杉内 かえるクラブ（福島県二本松市）
デイサービス利用者の「おいしいうどんが食べたい」という声を聞き、粉から練ってつくったうどんは大好評を得ています！

花咲く自治会賞
二本松市建設技術学院跡地 応急仮設住宅自治会（福島県二本松市）
まちの花「コスモス」の種を仮設住宅のまわりに播き、地域住民も交えての手入れを実施！笑顔の花が咲いています！

まちの情報発信賞
認定特定非営利活動法人 フロンティア南相馬（福島県南相馬市）
南相馬市のリアルな状況や住民が求めている情報を発信する基盤を構築！まちの笑顔につながる活動を続けていきます！

6時だよ！全員集合賞
リハ・アクティヴセンター TAIYO ①（福島県本宮市）
月１回午後６時から、お酒を飲みながらワイワイ過ごせる「居酒屋あづまっぺ」を開店！ここに来れば誰かに会える！

旅行で良好で賞
リハ・アクティヴセンター TAIYO ②（福島県本宮市）
月に１回日帰り旅行を企画！行き先は住民が決定！「一度でいいから行ってみたかった」など、喜びの声が聞かれています。

浪江のみんな顔なじみで賞
リハ・アクティヴセンター TAIYO ③（福島県本宮市）
浪江町出身者が暮らす４つの仮設住宅の住民がほかの仮設へ集結！周辺地域住民も含め、多くの人との交流を図っています。

交流でいがす賞
和田石上応急仮設住宅サロン（福島県本宮市）
仮設住宅で住民交流サロンを開催！近隣の保育園との交流も行っており、子どもたちと楽しいひとときを過ごしています。

元気健康づくり賞
アジア職業エコガイド・ウォーキング指導者協会（福島県南会津町）
仮設住宅住民のストレス軽減と運動不足解消のため、ウォーキングイベントを開催！東日本全域に波及することが目標です！

子どもまちづくり賞
公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン②（東京都千代田区）
岩手県陸前高田市、山田町、宮城県石巻市の３地域で「子どもまちづくりクラブ」を開始！子どもの目線でまちづくりを！

味噌の和でいがす賞
七ヶ浜復興促進団体「7up-reteam」（東京都江戸川区）
宮城県七ヶ浜町と福島県南相馬市で活動。風評被害を受けていた味噌の売り上げ回復を図り、復興を目指してます！

心のキャッチボールで賞
特定非営利活動法人 リアル野球盤協会（静岡県島田市）
誰もが楽しめ、運動できる、リアル野球盤。仮設住宅入居者の運動不足やストレス解消のため、実技指導を行っています！

音楽の力で賞
災害ボランティア 住田町基地別働隊長崎（長崎県長崎市）
「仮設住宅住民の心に潤いを」と、CD ラジカセセットの寄贈とコンサートを開催！ふれあいながら楽しめる時間になっています。

活動提案部門

スポーツの力で交流賞
指扇ファミリーバドミントンクラブ（埼玉県さいたま市）
１９８８年に考案された新スポーツ「ファミリーバドミントン」。東北の皆さんにも体験してもらい、いつか交流試合を！

ふるさとの手づくり賞
企業組合 であい村 蔵ら（静岡県松崎町）
地域住民が出資し、健康に配慮した食堂・配食サービスや地場産品などの販売を実施！地域も働く高齢者も元気に！

劇で啓発！賞
劇団危機（三重県熊野市）
“福祉で笑いを”と、社協有志で福祉の啓発をテーマにオリジナル劇を上演！社協ふれあいフェスタなどで発表しています。

生かせ高齢者パワー賞
ひとり暮らし高齢者の会「パープルフレンズ」（京都府京都市）
“高齢者は見守られるだけの存在じゃない！”をキーワードに、オリジナル替え歌を作成！防災意識向上と地域活性が目標です。

いきいきふれ愛賞
SA 北河内　百楽の会（大阪府寝屋川市）
豊かにいきいきと元気に暮らせる街づくりを目指し、落語や手品。詩吟などを行う、ふれ愛訪問を実施しています！

豊かなまちづくりで賞
社会福祉法人 ほっとスマイル（兵庫県西宮市）
阪神・淡路大震災後、住民同士が助け合えるまちづくりの重要性を実感し、住民主体で「ほっとスマイル」を立ち上げました！

支え合いがいがすで賞
ふれあいサロン喫茶みなみ（兵庫県宝塚市）
阪神・淡路大震災後に建てられた復興公営住宅でふれあいサロンを実施！地域の人たちも交えた交流の場になっています！

地域の底力賞
福知自治会（兵庫県宍粟市）
兵庫県西北部豪雨災害後、地元自治会が災害救援ボランティアセンターを設立！いち早く被災者救援に取り組みました。

地域力発掘賞
淞北台いきいきライフを推進する会（島根県松江市）
過去に発生した大渇水で助け合い・支え合いの重要性を実感。地域の高齢化を見据え、高齢化対策活動を行っています！

アロマで心ほぐしま賞
山口県立大学災害ボランティア実行委員会 ぷちボラ YP 勇気（山口県山口市）
山口県萩市の大雨災害により、仮設住宅に入居することになった人たちに、足湯とアロマテラピーを実施しています！

明るい地域づくり賞
トントントンカラリン 隣り組活動隊（香川県丸亀市）
地域住民の孤立化を防止すべく、「声かけ隊」「話の聞き役隊」「楽しみと楽しさ創造活動隊」を設立！希望や夢を届けます！

子どもの元気づくり賞
特定非営利活動法人 子育て応援 NPO フレンズ（香川県三豊市）
被災地の子どもたちが元気になることを目標に活動中！移住体験ツアーの開催や交流会を行い、つながりづくりをしています。

福岡から安心を届けま賞
久留米大学伊佐ゼミ（福岡県久留米市）
生産した無農薬野菜を宮城県などに送っています。一日も早い復興を願い、遠く離れた九州から「元気」をお届けします！

知恵と仲間の団結賞
任意団体 持続可能なまちづくり（福岡県久留米市）
地域課題を解決するため、ネットワークづくりを開始！自治活動が活性化され、課題解決の検討も充実してきています！

地域の縁がわ賞
下矢部西部地区社会福祉協議会（熊本県山都町）
廃校になった小学校跡地の小規模多機能ホームを、誰もが集える「地域の縁がわ」に！災害に備えた一泊体験も実施しています。

独立行政法人福祉医療機構 平成25年度社会福祉振興助成事業「自治活動と生きがい仕事で復興促進事業」

東日本大震災・おらいの地域（まち）の元気興し「第1回いがす大賞」実施報告

内　容

1　実行委員会の設置・開催

コンテスト（第1回いがす大賞）の運営について検討を行うとともに、実際の運営・開催後の反省を行う。

委員長：仙台白百合女子大学教授・社会福祉法人ありのまま舎理事長　大坂純氏
委　員：特定非営利活動法人つどい　事務局長　元持幸子氏（岩手県大槌町）
宮城県サポートセンター支援事務所　所長　鈴木守幸氏（宮城県社会福祉士会）
一般社団法人パーソナルサポートセンター理事・特定非営利活動法人ワンファミリー仙台理事長　立岡学氏
特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター代表理事・みやぎ連携復興センター代表理事　紅邑晶子氏
特定非営利活動法人Jin理事長　川村博氏（福島県南相馬市）
特定非営利活動法人暮らしづくりネットワーク北芝事務局長　池谷啓介氏（大阪府箕面市）
特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター理事長・
東北関東大震災・共同支援ネットワーク事務局長　池田昌弘

開催日：第1回　2013年7月18日（木）10:00〜12:00　CLC本部事務所にて
・事業説明（独立行政法人福祉医療機構 平成25年度社会福祉振興助成事業）
・実行委員会設置規定・委員長の選出、事業名・内容・審査委員・広報先・全体スケジュールについて協議
第2回　2013年10月31日（木）13:00〜16:00 CLC本部事務所にて
・募集要綱の発送、広報先、協賛企業募集について報告
・応募者集め、事前選考審査会（11月12日）の評価・採点基準、当日運営の協議
第3回　2013年12月21日（土）9:00〜18:00宮城県仙台市・楽楽楽ホールにて
・第1回いがす大賞の運営体制打ち合わせ、当日運営
第4回　2014年2月25日（火）15:00〜17:00　CLC本部事務所にて
・第1回いがす大賞及び実践交流会の開催報告と収支報告

2「第1回いがす大賞」の実施

実行委員会での検討を踏まえて募集要綱をまとめ、2013年9月〜10月に公募。事前審査を通過した団体・個人が、2013年12月21日本選でプレゼンテーションを行い、大賞を決定した。

1　事前選考審査会：2013年11月12日
宮城県仙台市・CLC本部事務所にて

被災地における実践＆被災地への提案実践に全国から93団体102件の応募があり、書類選考によって審査委員が15団体・個人を選出した。どの活動も甲乙つけがたく、審査会は予定の時間を越えて4時間もの議論となった。

審査委員長：仙台白百合女子大学教授・社会福祉法人ありのまま舎理事長　大坂純氏
審査委員：東京大学社会科学研究所　教授・希望学プロジェクトリーダー　玄田有史氏
特定非営利活動法人コーヒータイム理事長・福島県浪江町主任児童委員　橋本由利子氏
仙台経済同友会幹事・(株)横山芳夫建築設計監理事務所代表取締役　横山英子氏
社会福祉法人宝塚市社会福祉協議会　常務理事　小中和正氏

2　本選に選出された15団体を訪問し、本選でのプレゼンテーションの方法のアドバイスを行った。本選の際に配付するパンフレット及び活動を紹介する映像を作成するための取材及び収録を行い、編集・制作に取り組んだ。

3　本選：2013年12月21日（土）　宮城県仙台市・楽楽楽ホールにて

102応募のなかから事前審査を通過した15団体・個人がプレゼンテーションを実施するとともに、活動のPRや物品販売のできるブース出展スペースを用意。協賛・後援団体については表紙裏を参照ください。

来場者は約350人（来場者のアンケート結果は75頁をご参照ください）。

本選では、一般来場者が投票に参加できる「応援券」システムを導入（投票いただいた応援券は1枚100円換算で投票先の団体・個人に寄付。今後の活動資金としていただいた）。上記審査委員に加えて、次の特別審査委員も加わり、応援券で投票した一般来場者の意向を踏まえて審査を行った。

特別審査委員：男女共同参画と災害・復興ネットワーク　代表　堂本暁子氏
情熱家（演出協力）・吹上ワンダーマップ実行委員会委員長　博多和宏氏
仙台・宮城観光PR担当課長　むすび丸
司会進行：熊谷智美氏（サムシング／フリーアナウンサー）
川村 博氏（特定非営利活動法人Jin理事長／実行委員）

審査結果

次のとおり。大賞・準大賞・活動提案賞には賞金（10万円、3万円、3万円）のほか、大賞と準大賞には副賞（神戸いがす旅：2014年3月15日〜17日実施）が授与された。また、応募者全員に賞状と参加賞（協賛品）を贈った。

大　　賞　◆二本松市建設技術学院跡地応急仮設住宅（福島県二本松市）
準　大　賞　◆釜石あの日あの時甚句つたえ隊（岩手県釜石市）
特　別　賞　◆高橋久子（宮城県名取市）
活動提案賞　◆ボランティア「ぐるーぷ　なか」（兵庫県宝塚市）
おらほ賞　◆(株)onagawa factory小さな復興プロジェクト（宮城県女川町）
◆川根振興協議会（広島県安芸高田市）
おもせ賞　◆大槌町青年団体連絡協議会（岩手県大槌町）
◆特定非営利活動法人ふくしま新文化創造委員会（福島県福島市）
のさる賞　◆失語症友の会「はまりゃすぺゃ」（岩手県大船渡市）
◆認知症にやさしい地域支援の会（岩手県陸前高田市）
◆公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（宮城県仙台市）
おがる賞　◆特定非営利活動法人みやぎ子ども養育支援の会（宮城県石巻市）
◆東船岡地区子ども会育成会文化部 三名生親子太鼓（宮城県柴田町）
◆小浜風童太鼓（福島県いわき市）　◆劇団「ババーズ」（福井県福井市）

なお、当日の夜に、出場者・審査委員・実行委員・事務局の希望者で交流会を開催した（参加費は、自己負担）。

3　実践状況調査の実施

事前に、自治活動及び生きがい仕事を発掘するために訪問調査するとともに、応募者で評価の高かった事例を訪問し調査した。内容は冊子にまとめ、一部をＤＶＤ化した。冊子は1,500部作成し、都道府県・政令都市・中核市、都道府県・政令都市・中核市社協、岩手・宮城・福島県内の市町村・市町村社協、サポートセンター、コンテスト応募者などに配布。

4　「いがす実践交流会の実施

岩手・宮城・福島のエリアごとに、入賞団体を含む応募者による取り組みを発表し、共有するとともに、住民同士や支援団体が交流する場を設けた。

岩手会場
2014年2月8日（土）13:30〜15:30
サポートセンター和野っこハウス（岩手県大槌町）にて
釜石市民劇場、小鎚中村仮設団地自治会（大槌町）が実践発表。準大賞を受賞した「釜石あの日あの時甚句つたえ隊」、大槌町青年団体連絡協議会も参加して懇談。参加者22人。

宮城会場
2014年1月11日（土）13:30〜15:30
エル・パーク仙台　セミナーホールにて
特別賞受賞の高橋久子さん（名取市）、あすと長町仮設住宅自治会（仙台市）、ボランティアサークルこだま会（仙台市）が実践発表し、懇談。参加者17人。

福島会場
2014年2月9日（日）10:30〜13:00
二本松市建設技術学院跡応急仮設住宅 集会所にて
大賞を受賞した「二本松市建設技術学院跡応急仮設住宅」の見学・懇談。参加者15人（大雪のため、予定していた発表者の高橋久子氏と小浜風童太鼓は欠席）。

神戸いがす旅の実施

大賞・準大賞の副賞である「神戸いがす旅」は、2014年3月15日〜17日に実施。受賞した「二本松市建設技術学院跡地応急仮設住宅」及び「釜石あの日あの時甚句つたえ隊」のそれぞれの希望に応じて、神戸観光や視察（阪神・淡路大震災で被害の大きかった神戸市長田区や災害公営住宅の19年後の今を視察）のほか、3月16日には、活動提案賞を受賞したボランティア「ぐるーぷなか」とともに神戸学院大学で開かれた「地域支え合いを考えるセミナー」で実践を発表いただいた。

観光ボランティアの案内で、
神戸市の異人館街を巡る
二本松の鎌田さん、
釜石の北村さんと藤原さん

和田幹司さん
（1.17KOBEに灯りをinながた実行委員会委員長）
の案内で、
神戸市長田区の復興状況を視察する
鎌田さん
（最終日には神戸市役所の案内で
復興住宅団地「HAT神戸脇の浜団地」を視察）

2014年3月16日神戸にて
「地域支え合いを考えるセミナー」の
「東日本大震災と阪神・
淡路大震災の今を語る！」
で実践発表

マスコミ報道

河北新報	新聞掲載(募集PR)	10月10日
読売新聞	新聞掲載(募集PR)	10月11日
仙台市内コミュニティFM3局ネット	番組への登場(募集PR)	10月17日
FMいずみ「キボウノチカラ」	番組への登場(募集PR)	10月22日
遠野ケーブルテレビ	放送(募集PR)	10月15～25日
住田ケーブルテレビ	放送(募集PR)	10月15～25日
DateFM「Jサイドステーション」	番組への登場(募集PR)	12月10日
DateFM「頑張ろう宮城　希望のラジオ」	番組への登場(募集PR)	12月10日
FM太白	番組への登場(募集PR)	12月11日
河北新報　夕刊「仙台圏イベント情報」係	掲載(来場PR)	12月17日
DateFM「頑張ろう宮城　希望のラジオ」	番組への登場(来場PR)	12月17日
TV　「OHバンデス」	番組への登場(来場PR)	12月18日
「リビング仙台」	掲載(来場PR)	12月第3週号
東北放送ラジオ	電話出演(来場PR)	12月20日
NHKの夕方の番組(東北NEWSWEB)	ニュース報道(報告)	12月21日
毎日新聞	新聞掲載(報告)	12月22日
河北新報	新聞掲載(報告)	12月23日

※そのほか、連携復興支援センターやNPO、社協、大学ボランティアセンターなどのメーリングリスト、WEBサイトに掲載・広報協力をいただきました。

東日本大震災・おらいの地域(まち)の元気興し「第1回いがす大賞」

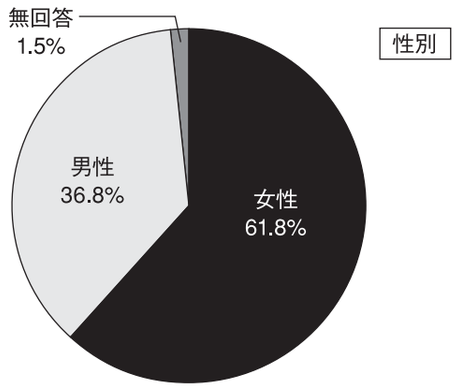
アンケート集計

2013年12月24日(土)仙台市太白区文化センター　楽楽楽ホール

【問1】あなたのことについて、お教えください。

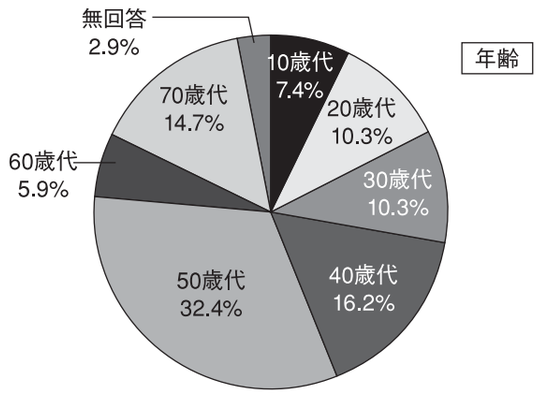
① 性　別

	数	割合
女性	42	61.8%
男性	25	36.8%
無回答	1	1.5%
合計	68	100.0%



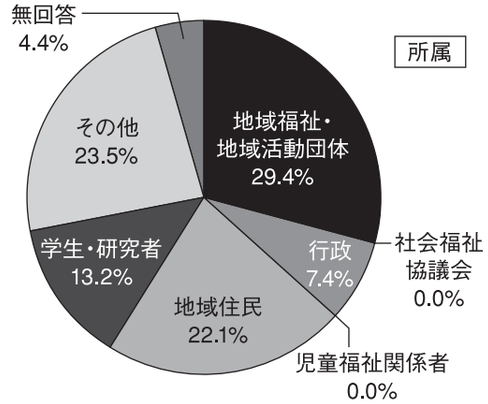
② 年　齢

	数	割合
10歳代	5	7.4%
20歳代	7	10.3%
30歳代	7	10.3%
40歳代	11	16.2%
50歳代	22	32.4%
60歳代	4	5.9%
70歳代以上	10	14.7%
無回答	2	2.9%
合計	68	100.0%



③ 所　属

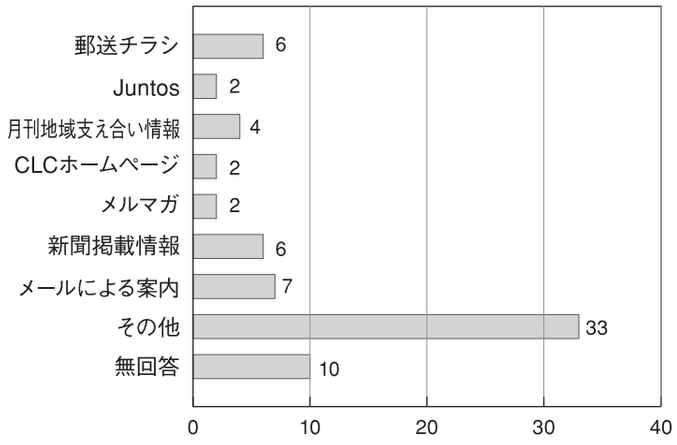
	数	割合
地域福祉・地域活動団体	20	29.4%
社会福祉協議会	0	0.0%
行政	5	7.4%
児童福祉関係者	0	0.0%
地域住民	15	22.1%
学生・研究者	9	13.2%
その他	16	23.5%
無回答	3	4.4%
合計	68	100.0%



【問2】あなたは、この大賞をどのような方法でお知りになりましたか？

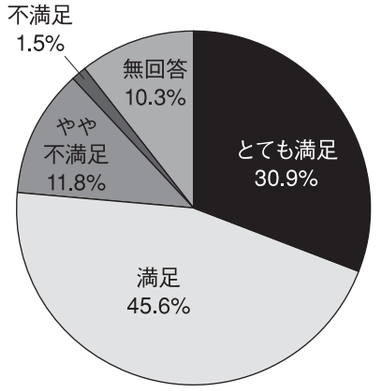
※複数回答

大賞を知った方法	数
郵送チラシ	6
Juntos	2
月刊地域支え合い情報	4
CLCホームページ	2
メルマガ	2
新聞掲載情報	6
メールによる案内	7
その他	33
無回答	10
合計	72



【問3】「第1回　いがす大賞」内容全般についてご満足いただけましたでしょうか？

	数	割合
とても満足	21	30.9%
満足	31	45.6%
やや不満足	8	11.8%
不満足	1	1.5%
無回答	7	10.3%
合計	68	100.0%



【問4】発表頂いた15団体で、印象に残った理由をお聞かせ下さい。

二本松市建設技術学院跡地応急仮設住宅

◆ 元気な活動報告がとても印象的。これからもさらに活動を盛り上げてほしいと思いました。
◆ 皆さまの行動力と明るさがすばらしい！住民が何かの先生役になっている。
◆ 自分たちで積極的に活動する、そのメリットを感じることができました。

釜石あの日あの時甚句つたえ隊

◆ 鳥肌が立ちました。感動しました。
◆ 巨大津波の風化の課題は甚句（うた）で！！これが一番！アイデア賞です。
◆ 感動的、歴史を伝える意義の需要さを改めて認識。
◆ 内容がかたり部風で子どもから大人まで心が伝わる。

高橋　久子さん

◆ 私も被災者です。涙がとまりませんでした。リーダー性に感動。
◆ 発信することの大切さと飾らない心からの声に感銘を受けました。
◆ 替え歌がとてもうまく、勇気と明るく生きる思いが伝わってきました。
◆ 震災で支援してくださった方たちに歌で感謝の気持ちを伝えていて感動しました。

ボランティア「ぐるーぷなか」

◆ 私も常に年をとっても地域との交流をもちたいと思った。
◆ 復興公営住宅の周辺地域の方々の支援活動が参考になりました。
◆ 同じ震災を経験した人間として、地域のつながりをつくるということの大切さは身にしみて分かる。「気取らず・気負わず」の精神で続けていくことの大切さがわかった。

失語症友の会「はまりゃすぺゃ」

◆ 今日初めて失語症のことを知ったが、他人事ではなく感じた。
◆ 失語症になった方、そして家族たちが抱えている悩みを皆で共同することにより明るく生きていけるという思いを感じた。みなさんの歌が会場の心を1つにしました。
◆ 社会的な弱者に対してみなが何かをしなければいけないなと思いました。

小浜風童太鼓

◆ 迫力万点！体にまでひびいてきてすごく感動した。
◆ 心にひびく力強い太鼓、心身共に力が湧いてくるようでとてもよかったです。
◆ 迫力万点！若い人の力ってすごい。伝統を大切にする心に感動。

特定非営利活動法人 ふくしま新文化創造委員会

◆ 力強いパフォーマンスでかっこいい。何もないところから創造するパワーを若者に感じ、少し未来に希望がもてた。
◆ 若者の前向きで、真摯な姿が美しく、すばらしい。

特定非営利活動法人 みやぎ子ども養育支援の会

◆ 将来をになう子どもたちのための支援に大いに私自身も応援したく思いました。
◆ 小さい子どもがキャラクターになっていてかわいかった。

東船岡地区子ども会育成会文化部　三名生親子太鼓

◆ 親子ともにリズム感、迫力が良い。
◆ 元気いっぱいでよかった。小さい子がすごくかわいかった。

㈱onagawa factory　小さな復興プロジェクト

◆ 海に左右されない木工事業を立ち上げられ、商品もおしゃれで素晴らしい。
◆ 地元の女性の雇用拡大につながっている。

認知症に優しい地域支援の会

◆ 意義ある取り組み。今後増やすべきだ。

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

◆ 被災児の場づくりが印象的でした。
◆ 同じ子育てをしている者として見習いたいと思いました。

劇団「ババーズ」

◆ トークが軽妙で話にひき込まれた。一度芝居を見てみたくなった。
◆ 高齢者の元気を支える仕組みとして劇団というのはとても効果があると認識しました。

川根振興協議会

◆ 住民が自分たちでそのまちでどう生きるかを考え実践しているところ。
◆ 行政に頼らない地域づくり。現在の日本にかかわる問題。

【問5】「第1回 いがす大賞」内容全般について

コメント

◆ たいへん勉強になった。次回も期待しています。
◆ 小さな活動にもスポットをあててほしいです。
◆ すばらしい取り組みだと思います。
◆ 子どもから高齢者まで幅広い活動の発表になっていたこと。
◆ 住民主体の活動の大切さを知ることができたこと。
◆ 第3部門は見てて満足しましたが、1部2部は団体の自己満足で終っているのでは？と思います。全ての構成が3部発表形式だと見ごたえがあったと思いますけど。
◆ 東日本大震災とおらいの地域元気興しは切り離したほうがわかりやすいと思います。
◆ 静かで重みのある舞台が多く良かった。地道に真剣にとりくんでいる姿が伝わってきた。
◆ 内容とも現実的で参考になる。
◆ 全国のさまざまな活動に感銘を受けました。素晴らしい企画でした。
◆ 発表時間が短かすぎた。
◆ いがす大賞が広く認知され、これからも、2回、3回と続くことを、祈念しています。応援しています。
◆ 第1回目なので、あまり分からなかった。
◆ 出演者も、演出も、とてもすばらしかったです。ありがとうございました。
◆ 被災しても負けない、立ち上がる強さを感じることができました。
◆ みんなが震災の活動を元気づけたいとしてボランティア、歌とかみんなが作っていていいと思いました。レンジャーとかあっておもしろいです…！
◆ 流れもテンポもよく、皆さん発表がすばらしい。
◆ 笑いあり、しみじみあり、よかったです。
◆ 司会（女性）がすばらしい。
◆ いろいろな取り組みをされている方がたくさんおり、勉強になりました。
◆ すべてに心が動かされました。最初の2つは見れずに残念！！"

「第1回いがす大賞」を終えて

被災地でのささやかな住民主体の取り組みを発掘・応援するために取り組んだ「第1回いがす大賞」には、初めての企画に不安を抱えていた事務局の応募予測80件を上回る、102件の応募が全国から寄せられ、うれしい悲鳴をあげることになった。また、「東北人はシャイな人が多いから」と、自薦だけでなく他薦枠を設けたが、フタをあければほとんどが自薦応募という想定外の結果に、震災による東北人の意識の変革を感じた。

2013年11月に開催した事前選考審査会では、「いがす」という方言を活かした大賞ネーミングのもと、「おらほ度」「おもせ度」「のさる度」「おがる度」「いがす度」という独自の審査基準を設け、書類選考によって審査委員が15団体・個人を選出したが、どの活動も甲乙つけがたく、審査会は予定の時間を越えて4時間もの議論となった。事務局スタッフは、102件の応募内容を分担して読み込み審査委員にわかりやすく説明を行ったとともに、選出された15団体・個人を分担して訪問し、本選でのプレゼンテーションの打ち合わせやヒアリングを担ったことで、被災地の実情を肌で感じ、特に自分が担当した団体を応援する気持ちが芽生え、大賞運営の意気込みを深めた。

大賞当日は、選出された15団体・個人が、笑いあり、涙ありの素敵なプレゼンテーションを行い、それぞれの実践に込めた思いが約350人の来場者や審査委員に伝わって、会場を一つにした。ここでも審査委員会では多様な意見が出されて議論となったが、その末に選ばれた大賞・準大賞・特別賞・活動提案賞の受賞団体は、現在の仮設住宅などでの暮らしを前向きにとらえ、震災の教訓を伝えながらも故郷を慕う活動であると同時に、19年経つ阪神・淡路大震災での復興公営住宅を支える地域の取り組みを東北に伝えるなど、「第1回いがす大賞」を象徴するものだった。また、来場者が観覧するだけでなく自分も投票に参加し、活動資金として気に入った団体に寄付ができる「応援券」システムの導入も、活動を認め合い称え合う「いがす大賞」らしい取り組みの一つだったといえる。

さらには、多くの団体にご賛同・ご協賛をいただき、応募者全員に賞状と参加賞をお渡しできたことで、今回入選が叶わなかった団体から「自分たちの小さな活動が認められた」とお礼の連絡をいただき、さらには「次回も応募します」と話してくださる方もいた。その後に開いた被災3県での実践交流会では、応募団体をはじめとする参加者たちから、「今後も定期的に交流する場がほしい」との声が聞かれ、ある協賛団体からは「今後も支援したい」との連絡を受けた。2014年3月15日〜17日に実施した、大賞・準大賞受賞者による副賞の「神戸いがす旅」では、それぞれの希望に応じて観光や阪神・淡路大震災で被害の大きかった神戸市長田区及び災害公営住宅の19年後を視察し、16日には活動提案賞受賞者とともに「地域支え合いを考えるセミナー」の「東日本大震災と阪神・淡路大震災の今を語る！」で実践を発表いただくなど、有意義な旅を企画することができた。

運営面では、映像・照明・音響を委託せずにすべて自前で行った頑張りはあるものの、舞台裏は綱渡りで、出場者へのケアや来場者への「応援券」システムの周知、出展ブースの管理面が不足していたという反省がある。しかしながら、上述のような声をお寄せいただき、被災地の支え合いの芽を発掘・応援するという大賞の趣旨が、少しは達成されたのではないかと感じる。

最終の実行委員会では、次回開催への思いが各委員から寄せられた。住民一人ひとりが生きがいをもち、地域で支え合って暮らす社会を築くことは、被災地だけの課題ではない。その事実を、「第1回いがす大賞」を通じて、あらためて実感している。

「第1回いがす大賞実行委員会」事務局

※2013年12月21日の本選の様子を収録したDVDです。本誌とあわせてぜひご覧ください。

第1回いがす大賞 事務局（順不同）

小野寺知子／田村洋介／伊藤良／千田浩子／菅原聡子／中川美沙恵／宇津野稔／永坂洋／千葉暢美／佐藤千春／木村利浩／若井直樹／今野依子／佐藤みち子／遠藤陽子／福島寛子

独立行政法人福祉医療機構 平成25年度社会福祉振興助成事業

東日本大震災・おらいの地域（まち）の元気興し
「第1回いがす大賞」15の実践

2014年3月31日
発行　特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
〒981-0932　宮城県仙台市青葉区木町16-30　シンエイ木町ビル1F
TEL 022-727-8730　FAX 022-727-8737
http://www.clc-japan.com/

印刷　東北紙工株式会社